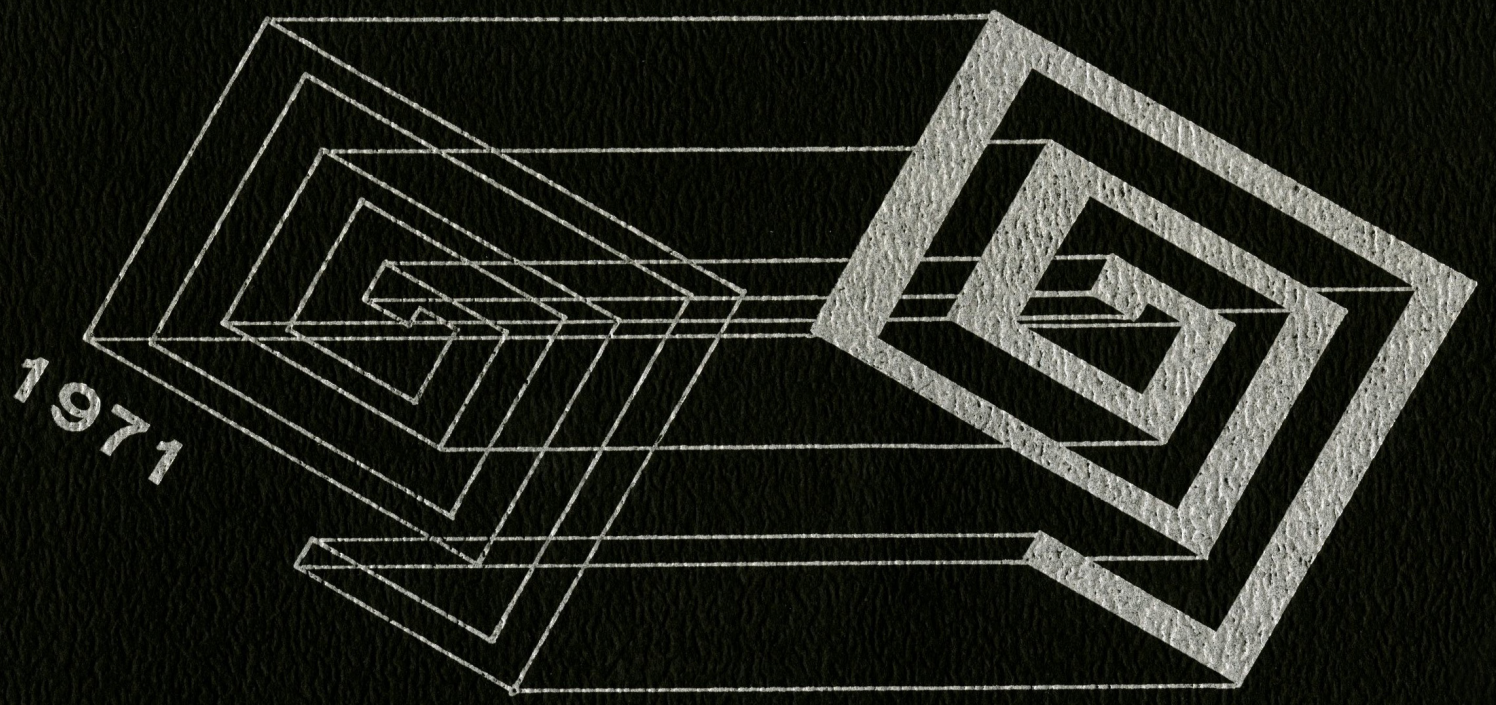


同窓会誌

東京都新宿区西新宿1-24-2 工学院大学学園同窓会事務室内 TEL (342) 1211 内線 287

工学院大学建築学科同窓会

3

私達建築学科同窓生は，伝統ある
母校を愛し，交友を維持発展させ
る為，互に親睦を図り，相互扶助
の精神を尊び広く建築の諸問題を
研究する事を目的とし，健全な人
間関係の確立と意志伝達の機関と
して，ここに規約を定めて，工学
院大学建築学科同窓会を結成する

同窓会誌 3

生活の歓び　それは	波多江健郎	4
26人と2組の新婚旅行	直井俊次	5
イタリアの建築家	深沢治男	8
イタリーの女	高森惇	9
イラスト新宿地下街		15
都市住居〈'70年コンペに想う〉	豊田勝己	17
生きづく都市，新宿		21
都市と自然装置	秋元敏雄	23
京王プラザ・ホテル	米井稔容	25
歩行者天国		27
マイ・リビング	望月大介	29
クラブ便り〔ヨット部〕	深沢治男	31
新・旧会長あいさつ　小高鎮夫	金田昭治	33
告知板		34
運営委員会報告		35
運営委員名簿		38
編集後記		41

●編集発行　工学院大学建築学科同窓会

●印 刷 所　株式会社　金羊社

●編集委員　園田邦彦　古角允宏

波多江健郎

生活の歓び
それは特にイタリーに
おいて見い出される
建物も絵画も彫刻もが
あたかも
路傍の草花のごとく
歌いながら
この世に生まれ出て来
たかの様に思われる

上記の言葉はフランク・ロイド・ライトが1910年、ヨーロッパを旅行した時に建築についてまとめた文の一節である。ハーバード・リードの、〝芸術の草の根〟の冒頭にも出てくる言葉でもある。

今大学はストライキの渦中にある。

同窓会からヨーロッパ旅行についての原稿を今年の始めに依頼され、その粗原稿をまとめていたが、私がいくら海外旅行の意味とか、意義を書いたところで、現在の私にとっては、うつろなひびき以外の何ものでもない。少くともまとめて書く事すら出来ない様な心の状態でもある。私の頭の中は現在のストライキの問題の根と、その終結を考える事で一杯である。従って私は自己の草稿を破いてすててしまったが冒頭にあるヨーロッパ旅行についての一つの感想を強いて示すとすれば、私はフランク・ロイド・ライトの言葉をのせてこの原稿の責を全うしたいと思う。

センチメンタル・ジャニー

26人と2組の新婚旅行

直井俊次

＜フインランド＞

「今日は，ヘルシンキに無事着きました。見送りありがとう御座居ました。小雨けむるアンカレッヂを飛び立ちコペンハーゲンに着いたのが朝6時30分頃，ストックホルムを経由してヘルシンキに着いたのが11時30分頃やはり小雨でしたが，宿舎のオタニエミに着いた頃はすっかり雨もあがりました。何とも静かです。豊かです。（Very Good）です。あまりのすばらしさに誰も口がきけないくらい。オタニエミ工科大学とピエティラのDIPOLI（学生会館）を見ました。今，DIPOLIでローソクの火の中で夕食をしています。楽団が『上を向いて歩こう』を演奏してくれました。白夜です。日本での夕方6時頃の明るさです。」……

初めて外国の土を踏み，言葉をかわし，食事をし，ホテルの個室で白っぽい夜の世界に身をおいて，それでもまだ高鳴る胸でこの手紙を書いた事を，今もつい先日の事の様に印象強く想い出す。本当にこの旅は素晴らしかった。何ヶ月かの手続きや，スケジュール打合せの繁雑な事も，金策の事も，休暇の事も，みんな飛び越えて，今私は未知の国，憧れの国にいる。そして暑い夏さえも置き去って。……

今日から27日間，ヨーロッパの旅に出る。最初の訪問国フィンランド。

私達が北廻りを選んだのは賢明であった。何故なら，うだるような暑さの東京をあとにして涼しい北欧に来た事で風土の差を，実に強烈に印象づけられた事と，イタリア等で感じるアジア的風土と異って，余りにも日本と異う環境に旅を強く意識出来た事による。私達が初めて泊った町は，ヘルシンキ郊外，オタニエミという学生町。オタニエミ工科大学を中心とした広大な土地に寮や，教会や，体育施設や，学生会館等色々な建物が建っている静かな環境である。一面の芝生にレンガとブロンズと木製のサッシュによって構成されたそれぞれの建物が，静かな，それでいて暖い表情を見せて建っている。

あちらこちらに氷河で削られた岩が露出し，野草が繁り，花が咲き，薄暗い杉木立があり，そんな自然のままの姿をいたる所とどめていながら建物が実に素直に自然と溶け合って建っている。そのこころづかいが，コンクリートとアルミのギラギラした東京から来た私達に，言葉にならない感動を呼びさます。なぜこんなにも異うのか。

フィンランドと日本では，国土に対する人口比が大体20倍違う。人間が少ないという事はこんなにも決定的な違いを生むものなのか。……アルヴァー・アールトが設計したカニサネラ，ケライトス（年金の為のオフィス）を見学した時，建物を案内してくれた40歳位の人がこんな話をしてくれた。

『アールトは私に2つの良い事をしてくれた。その1つはこの素晴しいオフィスを創ってくれた事。もう一つは，私は今オタニエミに住んでいるが，オタニエミの素晴しい環境を創ってくれた事だ。がしかし，今彼は私に悪い事をしようとしている。それはテューリョ湾に面した公園を壊して建物を建てようとしている事だ』……と。

ヘルシンキ駅前の再開発をここ数年計画し，第一期工事としてコンサートホールが，すでに内装に入っていたが，その再開発計画の中に公園が入り，けずられる運命にあるのを知り，彼は自然が壊される事に不満を感じているのだ。

自然の保護は自然と人工とのバランスの問題ではない。人間の体内を流れる熱い血が，自然を愛し，自然を最大限保護しようとする，その心なのだ。どんなに素晴しい建築家の手によって計画されようとも，人間の手にかかる事を強く排除しようとするこうした人達の意識が，強力な制約となり今日の素晴しいフィンランドの環境を生み出しているのだろう。原始の生活環境を近代の文明が次々と変質させつつある今日の世界にあって，今もなお文明という名のもとに，すりかえられ，破壊されゆく環境を一生懸命に守ろうとするこの国の人達に，私は深く心打たれるものがあった。……環境こそ，健全なる精神を生みだす母胎である。

私達の毎日の行為が環境の改善にどれ程の力になり得ているのか。どんな素晴しい住宅もどんな豊かなスペースを持った建物も環境の部分でしかない。悪化しきった日本の環境の中でその小さな部分の環境に与える役割を考える時，底知れぬむなしさを感じるのは私だけだろうか。……

＜イギリス＞

政治的にも経済的にも不安定な国に世界を注目させる様な動きが出るものである。安定しているヨーロッパの中にあって，第2の訪問国イギリスは，慢性的なポンド危機に加え長期にわたった港湾スト等，ヨーロッパの不安を一人でしょっている観があった。

そうした社会不安の中で建築の世界には，ジェームス・スターリングをはじめとして，新しい建築思想が華ばなしく開花していて，私達に非常な期待を抱かせた。

森と湖の国，フィンランドですっかり清潔ムードに酔っていた私達を迎えたロンドンの街並みは，以外に暗く寒々とした風景であった。ロンドンの下町に宿をとった私達が見たものは，以外と冷たい人間関係であり，何か目標を失った人間が陥る喪失感といったものだった。植民地政策による大英帝国の栄光の時代が過ぎ，みずからの力で再びヨーロッパに君臨しようとすれどポンドの不安は消えず，そんな

武藤章先生とザO.B. and 混成部隊 and 新婚さん

計画 1970年4月1日（武藤研O.Bを中心としての呼びかけ）

実施 1970年7月19日～8月14日　27日間

費用 45万円（小遣のみを除く）

目的 ヨーロッパ建築なんでも見ちゃおう。

イ）メンバー各自の主体的行動を条件とする参加

ロ）メンバー各自の意向によるスケジュールの決定。

時期が長く続いているのだろうか。何か町に冴えがない。イギリスの現在に私は日本の未来をみる。真の自由化が行われ，日本が大国になった時，はたしてどれだけの日本人が，生き残っているだろうか。バランスのとれない発展は力にならない。大衆消費のイタチゴッコで『円』は一見安定しているようでも，世界に本当に通用するのだろうか。華かさと暗さが，こうした状態の国には必然的に起ってくるのだろうか。ロンドンの歓楽街ピカデリーサーカス附近は実に華かである。浅草と新宿がごっちゃになった様な表面的快楽を求める人々の姿がこの町にもある。……

それでも私は期待する。新しいイギリスの胎動を。……

ロンドンが霧の都といわれていたのは一昔前の事。今はスモッグなんて全然ない。

大ロンドンに煙を出している煙突はたった一本。太陽が輝き，テームズの水面が光り，緑がさわやかな月を呼び，ケンブリッヂやレスター等の都市には明るく親切な人達がいる。外人が日本語をマスターするのに仏語の倍の6時間を要するという。

その日本語の最もデリケートな表現でもって公害問題から逃げて，アンバランスな経済政策をして日本の政府では，一体いつになったらロンドンの様な都市環境に戻れるのだろうか。

＜フランス＞

夕刻から夜にかけてのシャンゼリゼ大通りは楽しい。広い舗道に拡がったコーヒーテラスで濃いコーヒーをのみながら道行く人をながめる。色々な国籍の人達が思い思いのスタイルで色々な表情をして通る。見あきる事がない。土地っ子パリジャンが少ないと聞いた。今はバカンスで南に行っているとか。

だから生粋のフランス美人（眼がパッチリ，唇が薄く，粋な着こなし）にはおめにかかれない。でも素適な女性がたくさん通る。そこで何よりも表情が明るい。楽しんでいる。そんな感じがはっきりわかる。

僕の隣りでビールのんでるオッサン。齢は45，6歳。大声あげて寄って来た紳士。友達かな？　土地の人だろう？

たちまち4，5人になってワィワィ，ガャガャ，まだ日暮には早い。仕事が終ってこれから夕食か遊びに行くのか。その前のひとときこうして集って道行く人達をながめながら，井戸端会議よろしく，のんでタベる。実にうらやましい風景である。僕達の住む世界でもつい先頃までこんな生活があったと思う。

生活を楽しむという事はこんなにも素晴しい事なのかと改めて感じる。僕達もこちらのテンポにあわせましょう。

こうしてひとときを過して，なかに入り，立派なレストランで夕食をとる。再びビールに始り3～4品くらい出て，デザートで終る。その間およそ2時間。ゆっくり談笑しながら味いながら食べるのである。

ああすばらしきかな，人生。

＜イタリア＞

フィンランドの都市環境を山の手にたとえるならイタリアのそれは，下町とでもいったところ。都市計画にもとずき，モダーンに整理されているフィンランドの理知的な町並にくらべると破壊と建設の長い歳月を経たイタリアの町は，めったやたらにゴチャゴチャして，それでいて使いふるして，すっかり生活の臭いのしみ込んだ家具の様に，そこかしこの路地や広場に，汗みどろの人間を感じる様な臭いを見つける。

フィンランドの都市環境にひかれた私が，イタリアに来てまたまた浮気をおこした。

『どうも僕にはイタリアの方が性に合っているようだ』と

全体に静かで，品の良いフィンランドに比べて，イタリアは騒がしく，泥くさく，底ぬけに明るい。庶民的とでもいおうか。

しかめっ面して，いつも何か考えている様な顔して，話す事は観念的で，そしてすぐ我身をふり返って反省して「人生とは何ぞや」「生きがいとは何か」なんて一生懸命話し合って，それで365日考え通して。結局ちっとも楽しく生きていなかったなーなんて反省して，日本人て，そんな人が以外と多いのに，ここイタリアの人を見ていると，何しろくったくなく笑い，話し，歌ひ，遊んでいる。生きるとは，楽しむ事と見たり。

どうやって楽しもうか。その時間をどうやって作り出そうか。そんな事に恐らく皆，一生懸命なのだろう。なにしろ自分の時間，自分の権利，を非常に大切にする。

恐らくそれだから，それぞれの立場をそれぞれの価値を認めるから，公共建築物にしろ，古い街並みにしろ，大切にするのだろう。

そうしたものの持つ歴史の重み，人間の共通の願い，歓びがわかるるから彼らは立派に自分達のものとして生かして使っている。

“余りにも，余りにも人間的”なイタリアの町に私はただただ感動するばかりである。

千年の風雪に耐える石造建築の圧倒的な迫力には，木と土と紙の日本建築では表現しきれない人間の魂があると，私は視た。

（昭和40年卒）

イタリアの建築家

深沢治男

〈ジオ・ポンティ〉

今，見上げると，強い朝日の反射がクラクラさせる。透き通ってなめらかなファサードのピレリービル。巨大な，白い，まぶしいミラノの塔。欧州のいったいどこに脈々と受け継がれているのか，この造形の結晶力。

階段をかけ上って，ステンレスの繊細なポーチの庇を入る。壁，ローズウッドの色調に細かく組み込まれたステンレスの渋い目地棒が音律を拡げる。高く明るい受付ホールは，気さくで，リンとした空間。78才のポンティ氏，腰をいためた身体に杖をついて迎えてくれる。幾何学階段の前で，「この手摺は構造的ないみをそなえていて，しかも全体を構成している。……」，地下の集会ホールで，「この建物には，平行な線が一つもない。一つの線は必ずもう一つの線と交わっていく。これが私の自慢です」「この建物に，単価のことなど聞いてくださるな」という彼。（ピレリーは，ヨーロッパで有数の化学工業会社である）「大切なのは……そう，車を例に挙げれば，ワーゲンとフィアット。ワーゲンは一つの型で，それを変えないことに特色を持っていた。フィアットは，色々と型をかえる。その一つ一つに試みが盛り込まれている。我々はフィアットのように，工業分野に踏み込んで，既に工業化されたものに挑戦して，この腕で一つ一つデザインしていく。これからの建築にはその姿勢が必要だ。……」

彼は熱っぽく語り込む。「コルビュジェをどう考えますか」「君は彼が好きかい。私も好きだ。詩的だし……しかし彼の風をまねるのが多いのは困りものだ……。」

私は，彼にサインをお願いする。「私のサインに二つと同じのはないよ」と片目をつぶる。5本の手の指が，私のスペルへとスルスル伸びていく絵を描いてくれた。

話の後，上階の各部屋を見る。白，淡いクリームの光，さわやかな緑の草木，落着いた中にも活気のある執務空間のゆとり。

屋階はこの建物の構造が良くわかる。コーナーに顕われた二股を構成する打ち放しコンクリートの柱。クーリングタワーからの騒音を身に感じながら，私は思った。「この建物は，遺跡になっても，見られる」。

〈A・マンジャロッティ〉

「メタポリズムをどう思いますか」マンジャロッティは「キクタケ，クロカワ等はよく知っている。日本の建築には大変興味がある」と答えて，彼の関心は，次へと移っていった。あっさり流された事に，私は分り過ぎるくらい分ってしまった。この部屋の外は，中世の尼僧院。小さな車が行きかう道を，チョット入った所。夕日が半分静かに影を落す中庭を取りかこんで，ツタのからまる古い瓦葺の尼院なのだ。石の冷たい路面，なかば死んだような，白い鉄の花の手摺，階段を2階に昇った所に彼の事務所はある。部屋の中に入ると，明るい木の肌の光りでほっとする。木の床に木の製図台，白い淡喰壁に，トレペのスケッチがとめてある。6～7人の所員が振り返る。何かひまみたいである。我々の大好きな迫力なんぞは，どこからもにおってこない。

棚には，スベスベの白い縞入の石ころだの，ビー玉だの，壺だの，……。

次の部屋に通されて，スライドを見せて下さる。何が今，彼の関心事なのか。私は床に座り込んで聞き入った。美しい中年の所員がもって来てくれた形の面白いクッキーをいただきながら。スクリーンには，止金のホックを大きくしたようなガラス細工が一つ，次に三つ，次にそれらの集まったもの，といったぐあいに写されていく。造型の多様性，群の構成，コネクター，ジョィントと彼は執拗に追求している。

後で見に行ったミラノのアパートでは，オレンジ色の木の格子戸に，居住者のファサードへの参画を試みさせる。郊外の工場では，プレキャスト柱のジョイントに，彼自身の独創的ないみを吹き込んだ，漸新なデザインを見せてくれた。

別れ際に，サインをたのんだ。しかしすまなそうに，ノー。そして強く握手を返してくれる。彼の手は，とても柔らかだった。

ポンティにしろ，マンジャロッティにしろ，彼達の手になるものは全て美しい。それ以外のものは，例え能率的でも，経済的でも誕生させることはゆるされない。又，彼達の文明がつちかった目が，それをほうっては置かないのであろう。どこにでもいるような人達に思えるが，まずイタリアの二人の美の猟夫に出逢ったのである。

（昭和40年卒）

イタリアの女

高森　惇

昨年の４月９日，桜散る横浜を〝帰ってくるなよ〟という親友の声に送られて，50kg 近くもある大きな重い荷物３個を肩に両手にぶら下げ，よちよちと足取りも定まらず，仲間５人と６ヵ月間の予定でヨーロッパの旅に出発した。大きな荷物の中身は身廻り品からインスタントラーメン，梅干と種々雑多でスーパーマーケット帰りの若奥様の買物袋の中と比較しても遜色なく，違うのは，その片隅に定規，製図板，スケールといった商売道具がいれてあったことぐらいだった。

そもそも，この旅行計画の発端は，大学卒業当時にさかのぼり，アメリカ，メキシコから中央アジア，そしてヨーロッパと計画は２転３転した。そして南部イタリア，スペインの民家，北欧の現代建築に重点を置いて見るということで意見が一致し計画が進められた。グループ員６人のうち４人は本学の建築40年度卒の波多江研究室の同窓生，糸賀，館田，高森，松沢からなり，在校中は波多江教授の口癖である，You are hopeless! に日夜悩まされた面々で，現在は，他の２人も含めて，それぞれの職場で設計の仕事に携さわっている。

日本を出て，ノータックスのウィスキーに酔いしれた２日間の船旅の後，春まだ浅く，寒風が吹きすさぶ灰色のナホトカに大陸への第一歩を印した。ここで船からシベリア鉄道に乗換え，全面凍結の白い大河アムールを渡り，はてしなく白樺の疎林の続く大陸１万キロを横断してモスクワに行った。８日間も西へ西へと同じ方向に進む汽車の旅，しかも朝見ても夕方見ても，ほとんど変らぬ景色に時間の観念がおかしくなり，今さっき朝起きた筈なのにと思っていると，もう黄色の夕日が二重ガラスの窓から射して来たり，逆に地平線の彼方まで見渡せる変化のない広い景色をじっと見ていると，一瞬，地球が自転を止めてしまったのではないかと思える程，時間の経過が遅く感じられ，いつまでたっても日暮にならず，変に神経が苛立った。そして２，３日もすると各自の時計の針は，ナホトカ，モスクワ，日本時間とまちまちの時間を指し示し，どの時間も外の状況とは大きなずれがあって，食事に行くにも，朝起きるにも，十分な睡眠時間をとったのかどうか，時計を見て一瞬考えねばならず，時間というものが，全く相対的なものであることを痛切に感じた。丁度，オーダーがない建築のようなもので，生活にリズムがなくなり，単調な車内の生活も加り，考えるのも物憂く，ロシアの歌謡曲とでもいうべき，太い声の男性歌手が歌うスローテンポの，いかにも大陸的な歌を聞きながらウィスキーをなめているのが一番よい過越しかたのようだった。

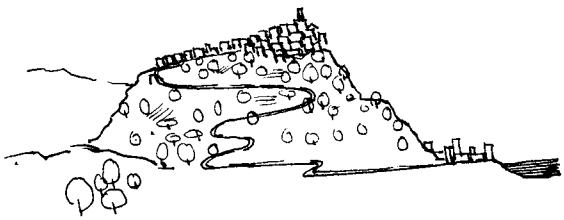
車窓に見られるソ連の民家は，月ロケット等の先端技術のすばらしさとは対称的に，いずれも開拓時代その儘で，貧しく建物は小さく，大方は30m² 程度の丸太小屋で，厳しい自然に打ちひしがれ，腐ち，木肌は生色をなくしていた。モスクワ等の大都市の新しい建物も柄が大きいのみで新鮮味に乏しく官僚，権威主義から一歩も出ず，何よりも暖たかさ，人間味が欠けていて，成長の一過程とはいえ失望を禁じえず，5°C という外気温の街中で身は縮まるばかりだった。

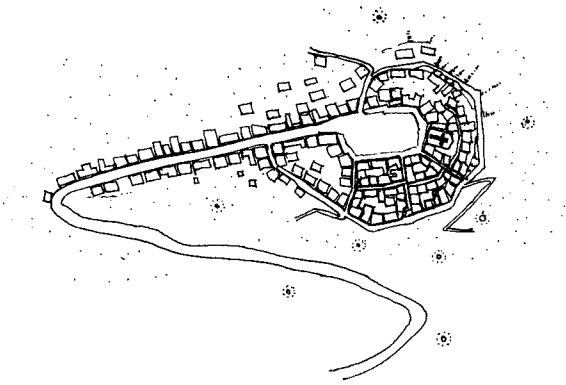
モスクワから，列車の座席下まで，亡命者の国外脱走を防ぐために調べ，緊張させられるソ連国境を越え，夜中，各検査のために2度も3度も起されるポーランド，チェコを通過。横浜を出て12日目に自由世界，しかも春たけなわ，黄色いレンギョウの花がこぼれんばかりに咲くオーストリアのウィーン着いた。

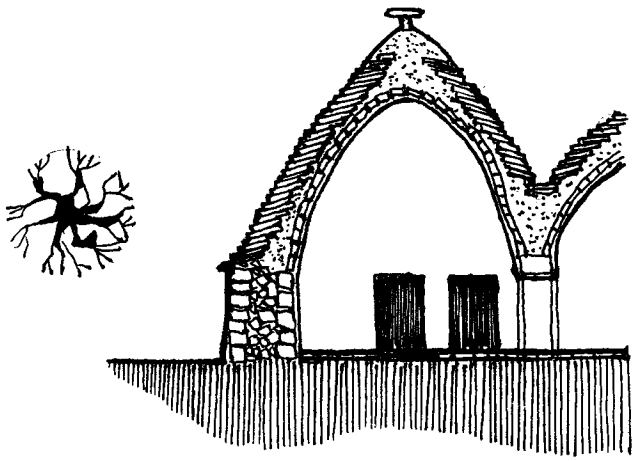
ここで出発前に東京で手続をしておいたフォルクスワーゲンの8人乗りマイクロバスを受取り，ウィーンに5日間滞在した後，荷物を積込んで，染まるかと思える青い若葉の中をヨーロッパの旅に出発した。透明な日射に牧草に覆われたなだらかな丘が輝き，道は尾根を，斜面をゆるやかにカーブを描きながら森影に消える。沿道の村々は深い緑の葉に埋もれ，教会の塔を囲んで赤瓦の家々が美しく建ち並ぶ。住民も素朴で親切で，とても気持がよい。そして白銀に輝くアルプスの峰々に挟まれた深い谷合いのチロル地方インスブルクでスキーを一日楽しんだ後，吹雪のアルプス山中の峠を越え，太陽の国イタリアに。

無数の甍(いらか)の波に，はっとさせられた水の都ベネシィアを経て紺碧のアドリア海を南下。バジリカ様式の質素な，それでいて宗教の純粋性をよく表し，空間的にもすばらしい，廊式木造屋根の教会がいくつか残る古都ラベンナに立寄る。この辺りから空はカラリと晴れ上り，豊かな陽光に気温もぐんと上り汗をかくほどで，麦畑の中に真赤なケシの花がたくさん咲いていた。途中，位置，形体等で日本にはない丘陵都市に興味をおぼえた。元はといえばマラリヤや，外敵の侵入を防ぐために避難所として一時的な使用の目的で築かれたものが，漸に永住的な都市となったといわれている。

そのひとつ，小さな集落のモンテパガーノ（図1）は明るいアドリア海を一望におさめる小高い丘の上に，海岸際を通っている本道から外れ他の集落からも孤立してぽつんと存在し，遠くから見ると緑の丘の上に白い石の塊がちょこんと載せられているように見える。そして見え穏れする，その白い町を横目で見ながらブドウ畑の中つづら折り

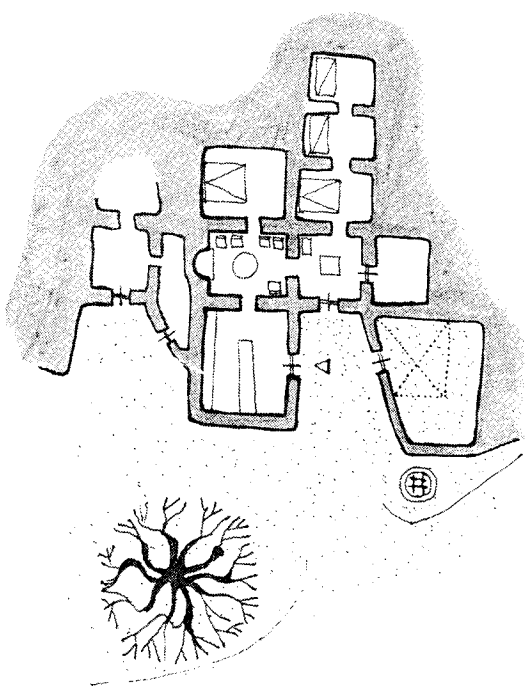






の道を登り近づくと，不整形な山の頂上附近にすっと青い空にのびる小さな塔を持つ教会が建ち，肌の粗い白い壁と赤茶色の屋根を持つ民家が，それを盛り上げるように寄り集まり一体となって，丘の頂上の教会を目指して波のように寄せている。村の中は中心の教会前に小さな広場があり，周囲には居酒屋や商店が軒をつらねている。広場から四方に，それぞれの表情を持ち何か語りかけてきそうな中世の面影濃い，狭く暗い路地がのび，傾いた石の額縁を通してコバルトブルーのアドリア海が望める。建物個々の現代生活への適，不適は別として，何百年も掛けられたその構成は実にうまく，町としてのひとつの集落としての一体感，住民と住民の集落と密着した関係を強く感じられ，人と人との接触が集落の構成要素を通して行なわれているという印象を受けた。

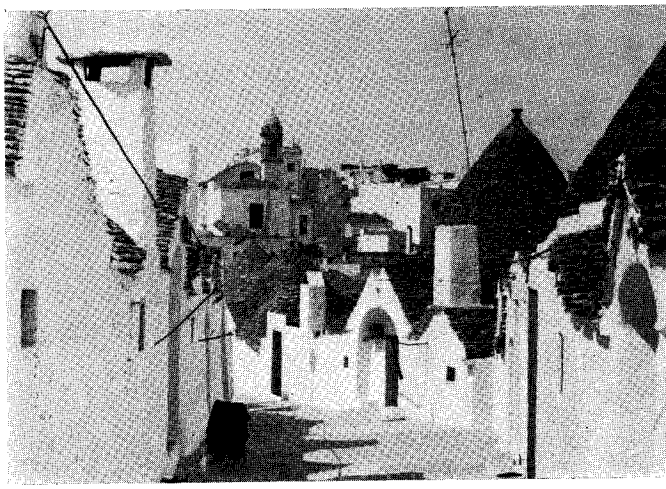
丘の上にあるものに限らずイタリアの古い都市集落の発生はいずれも極めて人物的で日本とは大分様子が異なっている。山の頂上にある町，大海原の中に島がぽつんとあるように緑濃いオリーブ林のうねりの中に白く浮かびあがる町，石灰岩がゴツゴツと露頭する人気のない荒地に突然，視界に入ってくる町といった具合。日本のように周辺にも家が点在し，その密度が漸に増えて町になるというのではない。沿道や畑にはほとんど家はなく，その都市の姿が視界に入ったかと思う間もなく急速に家々の密集した街路になって，少し行くと道が扇形に拡がり中心の広場となり，その一隅には教会が建ち，商店が並ぶ。逆に町を出るとすぐ人家は絶え，人影も疎らな畑なり荒地になってしまう。これは自然的条件，特に水の不足，度重なる異民族との住民全員の生死を賭けた戦争，土地が痩せ牧畜中心の農業，人々の気質，宗教の影響，石造のため長い建物の耐用年月と，それがための都市における土地の価格低下等，種々な要因が混り合い影響し合って，こうした町が出来上ったのだろうが，散村形式が比較的多く，街道形式の集落であっても密度の低い日本の自然発生のものとは町の雰囲気も違う。こんな発生の歴史上の相異が西欧人にとって都市は自分達が創るものという概念を持つ根底をなしているのではないかと思う。



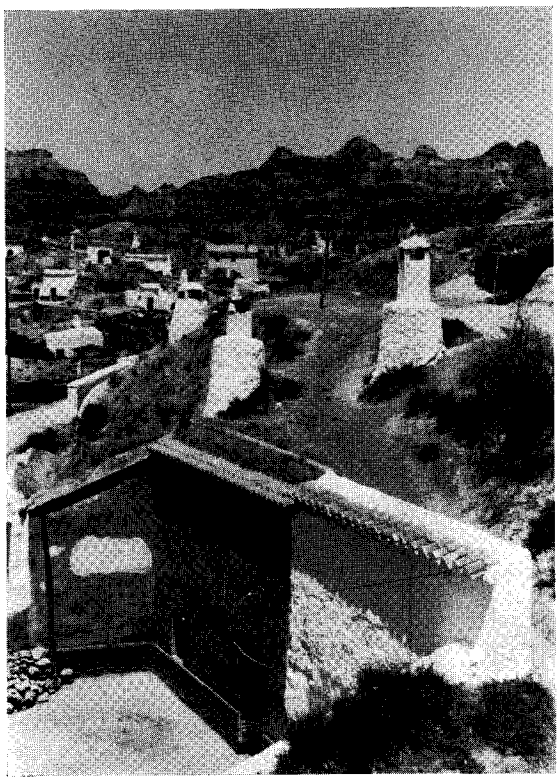
〈アルベロベッロへ〉

特異な屋根の形で知られるゴーリア地方のアルベロベッロはイタリア半島の踵に近い人口125万のバリ市郊外，内陸45kmにあり，集落としてかたまっているのはアルベロベッロの町だけのようだが，独立したものは大きな鐘乳洞

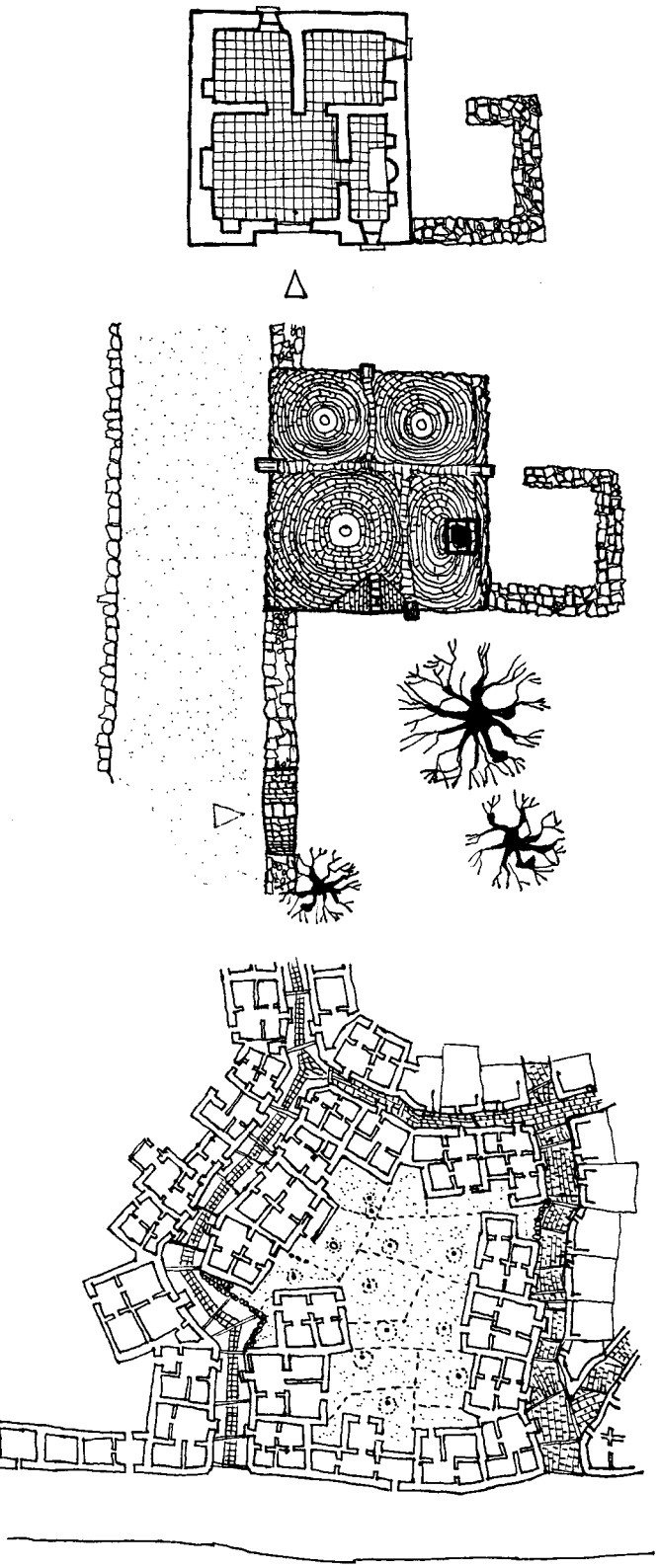
のあるカステリヤーナからアルベロベッロに通じる道路沿にかなりの数がある。又，この形体の原形と思われるサルデーニャ島に残る古代住居跡のヌラーゲに似た単独のドーム状屋根を持つ遺跡はバリ周辺にもいくつかある。ドームではないが似た要素を持つ民家はバリの北 200 km のカルガノ半島ペシチにも見られた。2，3の資料によれば，材料は泥ではあるが，同じく似た形を持つ民家はシリア北部のトルコとの国境に近い砂漠地帯とエジプトのナイル川沿岸にもある。これらトンガリ帽子のイタリアの片田舎の沿道にある農家は現在半分以上が廃屋となり人が住んでいない。しかし，石造のため建物の痛みは少なく，室内を見るには住民に断る必要もなく我々にとって好都合で，何度か車を止め内部を覗いたり写真を撮ったりした。



図示した平面（図2）はその中のひとつで，いぶし銀色の葉裏が風に揺れ，光るオリーブ畑の中，道路近くにあり，道と畑，畑と畑は背高ぐらいの高さがある野石積の厚い塀で区画されている。建物はその畑の中にあって外からはオリーブの円味を帯びた木影越しにトルロと呼ばれる屋根が2つ3つと重なり合っているのしか見ることが出来ない。敷地への入口は建物より少しはずれた所にあり上部に切妻を付け，ややもすると単純になりがちな入口を引締めている。建物本体の入口は切妻壁の下に半円のへこみを更に一段加え，強烈な太陽の濃い蔭の助けも借りて切妻，半円，そして矩形の入口と3段に強調している。内部は扉を開けて入ると玄関もホールもなく，すぐ居間兼食堂となり広さは8畳ぐらいで一部屋を単位にして屋根がそれぞれに架けられている。そのため部屋が大きくなれば屋根も大きくなり天井も高くなって，その空間全体が大きくなるという相関関係が生じ，外観にもリズムを与えている。建物の材料はこの附近で採れるというよりむしろ地表どこにでもころがっている薄茶黄色の石灰石で，これを拾い集めて70 cm ぐらいの厚さに積上げた壁上に，今度は 20〜30 cm 角ぐらいに削った石塊をドーム状に積み重ねて構造体としてある。そのドームの上に壁上から丹波石のような平板状で吸水性の少ない石が多少の勾配をつけて重ね上げられている。頂部は粘土プラスターのようなもので円錐型に塗り押えその上に石製の頭飾りを載せている。



外部仕上は壁のみが白く塗られ屋根は生地の儘，内部は積み上げられた石に直接白い石灰が壁から天井まで区切なく一面に塗られ，薄暗い光に意外なほど大きな空間を感じさせ，石造にありがちな圧迫感は全くなかった。そして特に深く円味のある天井は見る者に黄昏時の底のない空を思い出させ心を和まし夢を与える。居間の右手は台所となって



いて正面壁に暖炉が設けられその左右は壁が抉られ棚となっていた。窓は各部屋に40cm角ぐらいの小さなものが一つあるだけで明るさは十分とはいえないが暑さを防ぐためにはよいようだった。寝室は居間の奥に左右対称にありどちらも4畳半ぐらいの大きさで他の部屋同様，個々にドームの屋根がのせられ仕上も同一だった。この周辺で他に3軒程見学した後，曲りくねったオリーブ林の中の道をアルベロベッロの町を目指して出発した。

そして町に着いた頃丁度昼食時間になったので広場のレストランに入りブドウ酒を飲みネギの輪切のように太いケチャップソースのかかったマカロニ，ローストチキン，パンで食事を済ませた。このレストランで給仕をしていた少年もそうだが南下するにつれて小さな子供の働く姿が目につき，大体日本の小学校卒業程度で一人前の仕事をやっている。又よくわからないのが原地の人々の生活時間で，一体何時に起きて食事をし働きに，学校に行き終って帰って来るのか，町にも村にもいつでも学齢期の子供の姿があり，大人も畑で働いている姿は滅多に見掛けないが，街中の木蔭あるいは家蔭には朝から多勢の人々が老いも若きも家の中から椅子を持出したむろして何やら話しをしている。日射は確かに強いけれども湿度が低いのでさっぱりしていて日本のじめじめした夏の暑さに比較すると天国で働らかずにぶらぶらしているのが不思議に思える。

イタリア人の特質とよくいわれるナポリやローマの民衆のような底抜けの楽天性を持つ人は南部には少く，遊んで人に気を許さないところがある。子供達は日本という単語をよく知っていてジャポン，ジャポンと寄ってくるが貧しい地域ではその言葉の後に出て来るのは手とシガレットという声が多かった。一度バリ市街の城跡で暑さにうだり車を停めて休んでいたら一人の少年が近寄って来て煙草を欲しがって騒がしく附きまとい，その執拗さに嫌気がさし車を走らせたところ，その少年は我々に罵声を浴びせながら車に体当りを試み危うくひっかけそうになって驚かされてしまった。デザートに果実や木の実入りの美味しいアイスクリームを食べて一服して車を置いて町の中に入った。

ここでアルベロベッロの町は小さな谷の道を挟んで両側の斜面に広がっている。そしてその北斜面にトルロと一般に呼ばれる円錐形の屋根を持った蟻塚を思わせる集落があり，広場や教会といった時代のやや新しいものはもう一方の南斜面から丘の上にかけて存在している。この丘の上の細長い広場の端から大リーゴの木々に囲まれた特異な屋根の重なりと集落全体が眺められ，私達が行ったときは下の路地から口喧嘩をしている若い主婦の甲高い叫び声が石の

壁，道に大きくはね帰って聞えてきた。広場から急な階段を下って谷の道に出るとそこは観光地化し沿道には露店のみやげ物屋が何軒か並び，原色のはでなショール，赤銅の艶々した鍋や民芸品が売られていた。

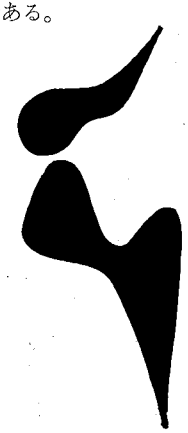
集落の内部に一歩足を踏み入れると今までとは全然別世界となり，真白に塗られた肌の粗い壁に挟まれた石敷のゆるい階段状の坂道は強い日射を照返して目がチカチカする程まぶしく，棲壮なまでに澄み切った青い空に黒ずんだ屋根，そして白い壁との強烈な対比が見られる。そして上から眺めたときはさほど大きさを感じなかった集落は中に入ってみると非常に大きく感じられる。これはどの道も土地の起伏に沿って微妙に歪みながらゆるい登り坂になっている事，しかも折れ曲りの歪みの効果というか不規則にゆるやかにカーブして見通しがきかないことによるらしい。その上様々な重なりを見せるトルロが前の期待を絶えず抱かせ，入口と小さな四角い窓しか穿かれていない道の両側の壁は切目なく連続し，うねりながら白い変化に富む帯となって上に上にとのびてゆく。この道のうねりは川の流れのようにあるところでは淀み渦を巻き，しかし決して切れることも留まることもなく流れ続ける。構成上の特徴は壁も屋根も一つの網のように一体として緊っていることで，外からは隣家との境も，内部の間取りも各自見当がつかない。このためもあって入口，屋根の頭飾り，煙突の形体には工夫がこらされ一軒として同じ物がないかと思えるほど変化に富み，それぞれ家のシンボルとしての個性を主張して見る者を退屈させない。

ここでは実際にその中で生活を今もしており，その斜面の中腹に建つ一軒の入口脇に小学生用のような小さな木の椅子を持出して涼んでいた黒服を来た老人夫婦に頼み見せてもらった。入口は2ヶ所あって，ひとつは急な階段で貯蔵庫として使用されているカビ臭い地下室に通じ5～6本の大きな木樽が無雑作に転がしてあった。地下室で思い出したが，ここから 150 km 北のサンタ・セベロでは地下を居間や作業場としてその町の大方の民家が使っていた。それを知らずに私は地下への入口が各家にあるので不思議に思い何に使っているのだろうと薄暗い入口から下を覗いたら居間でくつろいでいた4，5人の人々からジロリと見返えされ，予想もしていなかっただけに冷汗をかき，ほうほうの体でその場を逃げだした。話しはそれたが住宅のほうの入口は太いロープで編まれた色彩豊かな縄のれんが下げられ，入ってすぐが居間で右手が寝室，正面が食堂，その右手が台所で，この家は食堂の先に瓦葺の作業室が付足されていた。仕上は沿道のものと全く同じプラスターで平面も大差ない。違いは道路の反対側に四方を家で囲まれた共通の中庭を持ち集合住宅のような集落を形成し，道は坂の緩急，幅の広狭，屈曲，石畳のパターンの変化と組み合わされて快よい喜びを与え，自動車に害されることなく家の空間の延長として使われ親しみのある界隈を形造っている。集落の空間を構成している要素は印象の強さに比較して極めて少ない。それは石畳の歩道，家の壁，同じような規模と平面から生れる同形式の入口，窓，屋根などである。

いずれの場所に於てもその材質感は相似であり，種類も限られている。石と石灰，木は建具のみ，棚や暖炉は壁をくりぬき，台は石を積み，床は石を敷き並べている。紙数が足りなくなったので細かい説明は省くが（図3）は構成要素がより少なくなっているスペインの内陸グラナダに近いバザ附近の売居住宅の平面である。粘土質の自然の崖の丘をくりぬき壁，天井はそのくりぬいた土肌に直に白い石灰を塗って仕上げ，床は石を敷いている。外部は入口周囲の壁だけ横長に白く塗って家があることを示している。黄土色の乾き切った緑のない大地から白く塗られた様々の形をした煙突が生物のようにぬっと突き出ている情景は平面と共に非常に興味深かった。

こうした実用上最小限度の目的を満たす空間が多少の改造で現在も生き続け，これからも生き続けるであろうと予想されること，そしてそれが見る人に深い印象を与えるということは，工作された度合も低く，かつ精神的な表現にも乏しいかもしれないが，建築がもともと画や彫刻と違って，実生活上の要求や構造上の制約を無視して成立たない芸術だという点を考えると，これらの中にはそのような建築の美しさの本質的なものが，建築そのものの根源が，豊かに含まれているのではないかと思う。

表題の「イタリリの女」は紙数がつきたので，次の機会にしなければならないのが残念である。



南京

工学院を経て副都心

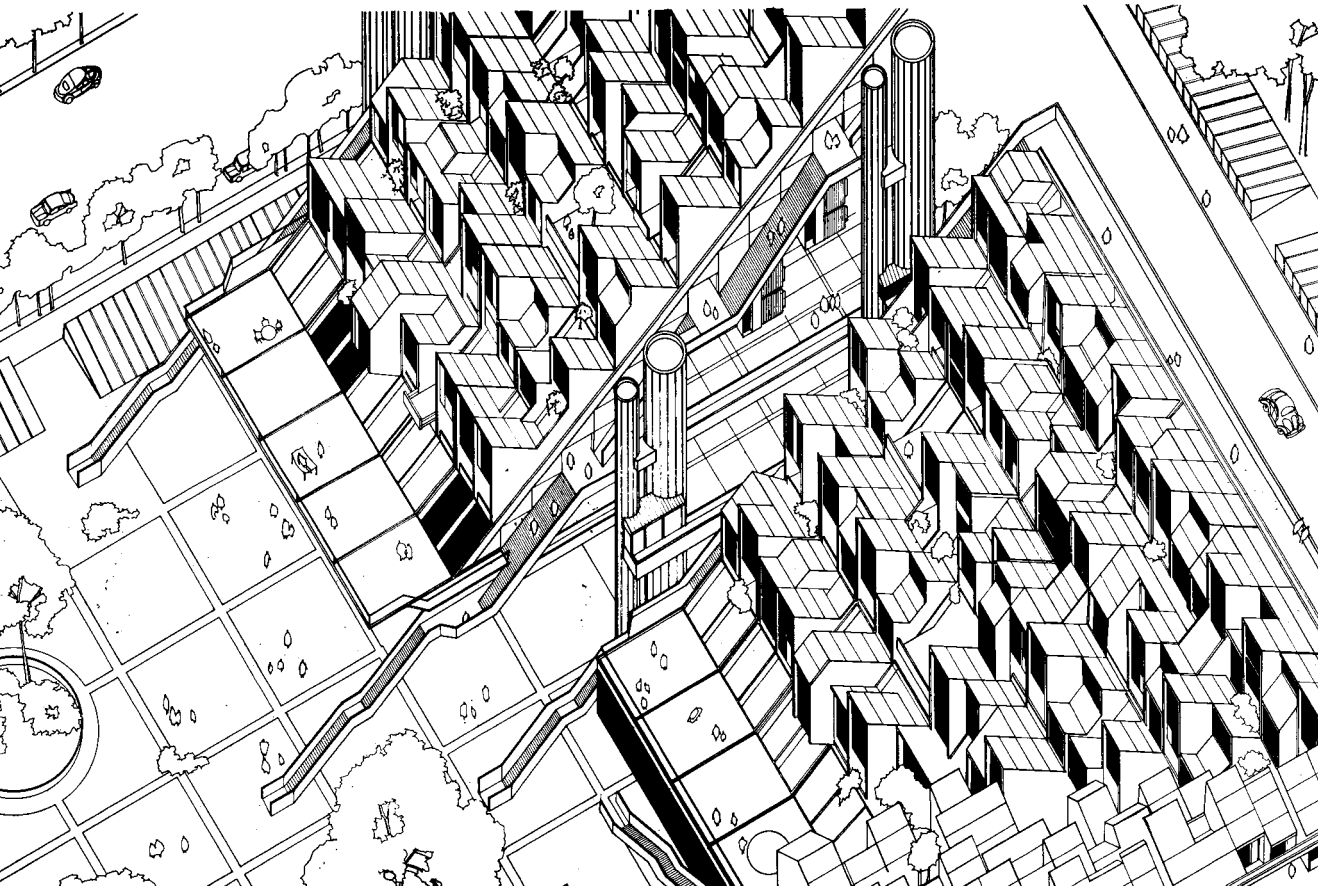
都市住居〈'70年コンペに想う〉

豊田勝己

今回新建築のコンペに入選できた事は，僕自身の今までの総括という意味で意義があったと嬉しく思っています。そもそもこのコンペへの参加の直接の動機というのは，実に単純で今思うと少々滑稽なのですが，アイソメのみを規定したところにありました。かつてのこの種のコンペの，四角四面の規定からほぐされた自由さが大層気に入ったものでした。そのねらいは，生活の映像を肩をほぐして自由な発想のもとに描けという事であり，かつ適確な建築的情況描写を伴うものとして受けとったのです。生の生産の器は当然考えるべき問いかけでもあるので，別題としておいておきました。この機会にコンペの情況から発想問題点をまとめてみたいと思います。

○情況

このコンペは僕自身の不安定な情況の中かから始まりました。それはエキストラ人間(？) としての自己の発見から始まったのです。情報と馴れ合いの中に，トップリと浸ってしまっている自分を発見した時，フト自分が受動的人間としていつの間にか，創意の人間から遠ざかっているのを感じたのです。全く僕自身に直接関係のない事柄の周りを，ただグルグル廻っているにすぎないからです。その他大勢の人間としての自己を見い出した時，やりきれなさと嫌悪感がやって来たのです。ハナバナシクモメザマシイ建築の変貌の様相を見つめて，タメ息をついたり，チョットドキドキしたり，すぐ忘れたりバカバカシサを感じたり，時には思いつきの空間論をブチマケ合ったりアッサリ消えてしまったり……。カーン，ムーア，ヴェンチュリー，アレグサンダー……etc. と次々と生れる建築物語の現代の主役に明らかな観客としての目が私自身に在るのです。これはまさしく，エキストラ人間の誕生でしかないのです。僕自身は一体何者で，何が可能なのか，そして何が確かなものなのか，その問いかけは競技場の外で観客のうごめきから競技の様子を想像してもはじまらない様に，競技その



ものの中に首をつっこむ以外，僕のエキストラ人間脱皮の道はないのです。

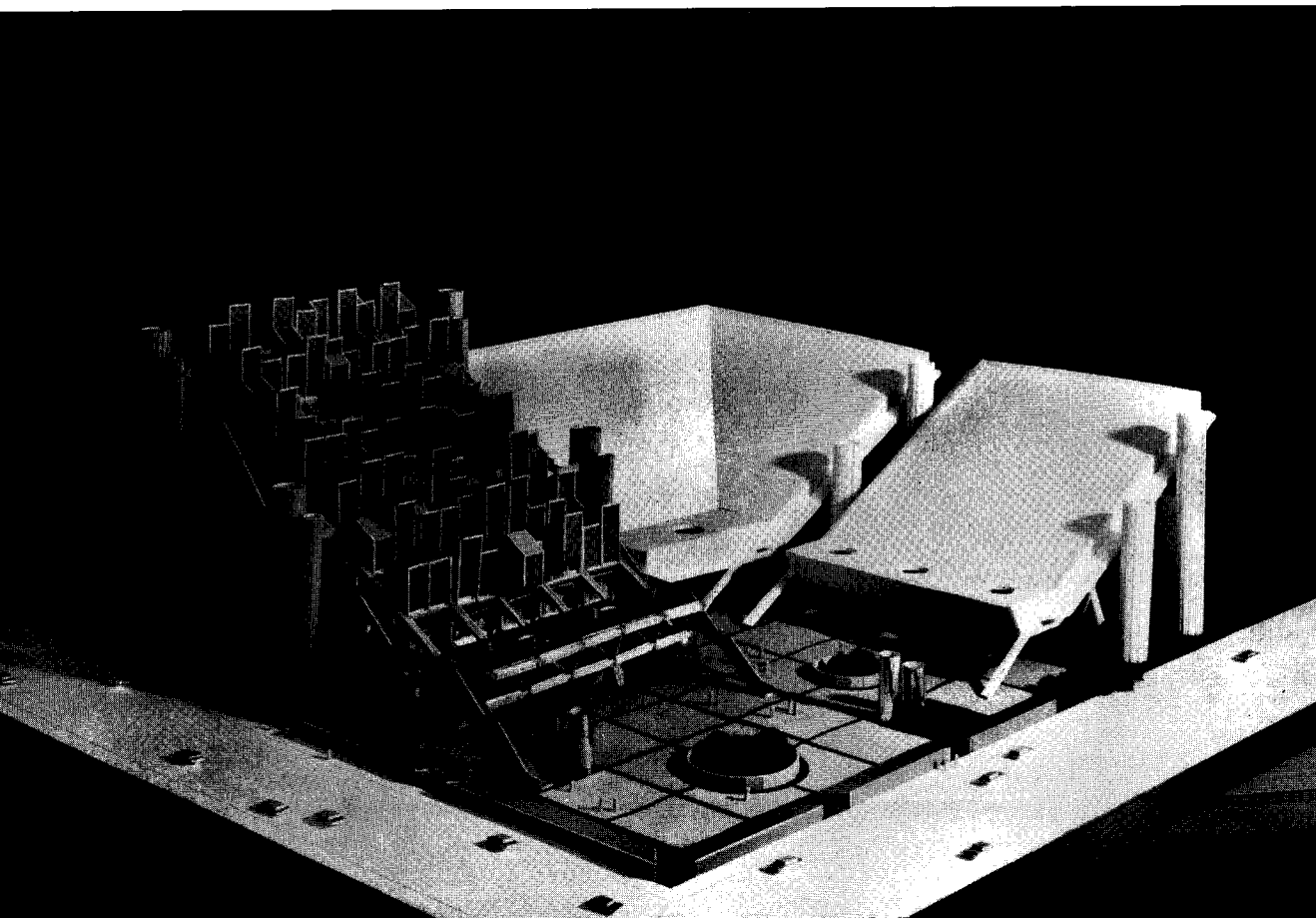
○発想

このコンペの課題に接してとっさに考えた事は「新しい人間」の場というパクゼンとしたものでした。それは新しい環境によって，新しい空間体験の中からの新しい人間像の誕生というものでした。草の根主義の浸透は明らかに新しい人間像を物語っているようです。人間を神格化したり極端に美化したり，寸分のクルイもない厳格さの中にとじ込める事をやめ，行動と自由を主体として素朴な人間をとりもどそうとする一つの現れだ思うのです。プリミティブなどろくささの表現，空間の造形化とグラフィック化によって，それは粋をきわめ自由でおすましをしない若々しい天使達の，かっこうの舞台となっている様です。しかし永い人生の舞台としてそれは持久性があるのかと思うと，この新しい人間の器も少々不安なものと映ってきます。その理由はこれがほとんど単一の器であり，内部の空間構成は永遠に不変だからです。結局これは空間の表現や形態の問題にとどまり，空間構成システムに対しては，何ら新しい提示がない訳です。ですから群住居として考えた場合，ほとんど力を失なってしまうでしょうし，人間と人間のかかわり，社会都市とのかかわりが不明瞭なのです。それはある種の新しい既存の人間像を示したにすぎないと思うのです。

僕の考えた新しい人間というのは，もっと巾のひろい，家という単体の中だけでない全体的（都市・地域）な物的環境の中で見通し行動する人間というイメージでした。生活だけをとりあげた場合，かつての長家のクマさん八さんの生活は，それを彷彿とさせるものがあります。彼らにとって家は長家のアルユーグにすぎず，こわいカミサンの居るところであり，長屋全域が彼らの生活領域なのです。今日人々の行動領域は拡大されてきているといいますが，車等交通エネルギーを除いた場合，そう広い領域を描いていないでしょう。まして生活領域だけを考えると個人の城の中だけに留まってしまうのが現実でしょう。職場，酒場，家とノミの様な飛び跳ね領域が今日の典型的なパターンといえます。その間のクッション・スペースを家と地域，地域と都市の間に有効かつ魅力的なものとして導き出し，個人の城の概念を打ち砕す事が第一の条件です。

新しい人間の器の第二の条件は，家そのものに根ざした人，家族の特性の確保という事です。人間の非合理性をいかに空間化し，性格的な位置づけを示すシステムを見いだすかという事で，量的変化よりもむしろ質的変化を重視し，集合化された住居の画一化からの解放が，人の解放に連がるという概念で，動的な生の活動に対応しうる空間構成システムの発見が，この項の必要条件となります。

第三の条件は，個室空間の分解です。従来の個室の生産的な場をファミリーの場に組み込む事によって，家の本質的な部分としての表現への参加を



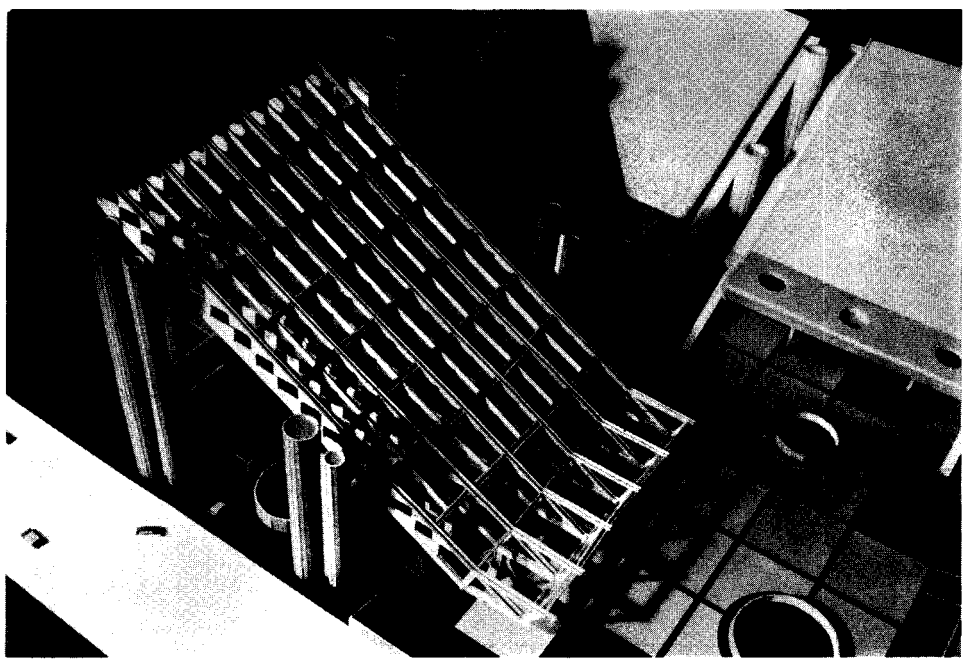
もくろんでいます。それは元来家が居間や食堂を中心として展開する事により，巣と化したクローズな個室が空間的には断絶して，何ら家の特性に参加しえないという消極性をもっているからです。従来の生活システムの個定化は，単に居間空間の中でのみ空間の造形を行うか外部の残余空間に力を注ぐ以外になく，せめて吹抜を創るか高い天井にするか，個室との連がりを透過性のあるものにするかにとどまっています。人の生活を規定するという立場はとかく誤ちを犯しやすいのですが，平々凡々とした生活の中でもフット生れる行為やある種の感情は，意のままでない場合が多いものです。僕自身ひとたび活動が始まると，製図板のきちっと置かれた本のきれいに整理された穴グラから逃げ出して居間（残念ながら，これは寝室も兼ねているのですが…）を一人じめにして気ままなふるまいを開始するのです。人と物とのかかわりは，スペースの中で不思議な悲鳴をあげています。従来の個室の機能を分解し，基本的な生活を確保する最小限の空間をカプセルとして，増減に対応できるシステムをもって単純化し，生産的な部分を家の性格的な部分に導入するのがこの項の目的です。

次が都市の問題です。公害都市もちょっと優雅に考えると，不思議な魅力をもった海のようにも見えてきます。時には人をのみこむ荒波を伴うし，刻々と色を変える海はぶきみなほど平隠さを装う事もあります。この変り目の早さが都市の力であり，僕達の感覚を触発する要因でもありましょう。動いていれば安心できるという行動人間にとって恰好の場であり，創造の交歓の場でもありましょう。この活動の器である，都市という海に浮かぶ群住居を考える場合，どの様な造形，空間構成が家や地域のもつ特性を失なわずにかつ都市に有益な空間を生みだすかが，第四の条件になります。そして第五の条件が人の心の原点に宿る美意識をどう表現するか，あこがれ，安堵，精神的シンボルとして，持続しうる物的環境はどの様なものなのか。都市の中でのダイナミックな美，住居におけるヒューマンな美，それは機能が喪失してもなおも燃焼しつづける力を必要とするでしょう。現在，超高層とパルテノンが，薬師寺の東塔が共存しているのは，僕達にとって最大の悲劇なのかも知れません。今日の生活や機能には全く要をなさない遺物が，堂々と地球上にのさばって，物，形，空間を誇示し，僕達を嘲笑しているかの様に思える屈辱感はどこからくるのだろうか。それは明らかに，今日のどんな建築を集めても立ち打ちできない，美の力の強さにちがいないのです。

この問は永遠に未決に終るでしょうが，少しでも力に近ずきたいものです。この作業は精神の強い参加を伴うので最も意義あるものです。

○解決

解決のための方法の論理は，簡潔かつ明瞭な方がよいと常々考えていました。それは考えられるあらゆる手段を網の目にふるって，節減するという作



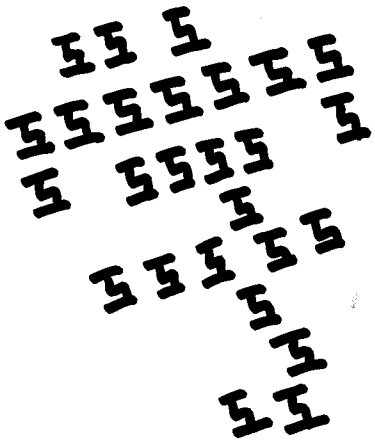
業を伴うからです。そして方法というレールが敷かれて，実体化し空間として形体として環境として確かな位置づけを発見する事の方が，はるかに重たい作業であり，99%はそこに費されるべきなのです。前項に上げた五項目の条件及び付属的概念を統合して，秩序づけ一つの環境にする方法が必要となります。これは発見を伴うのでコンピュターも無能化して，人間にしかできない作業といえます。

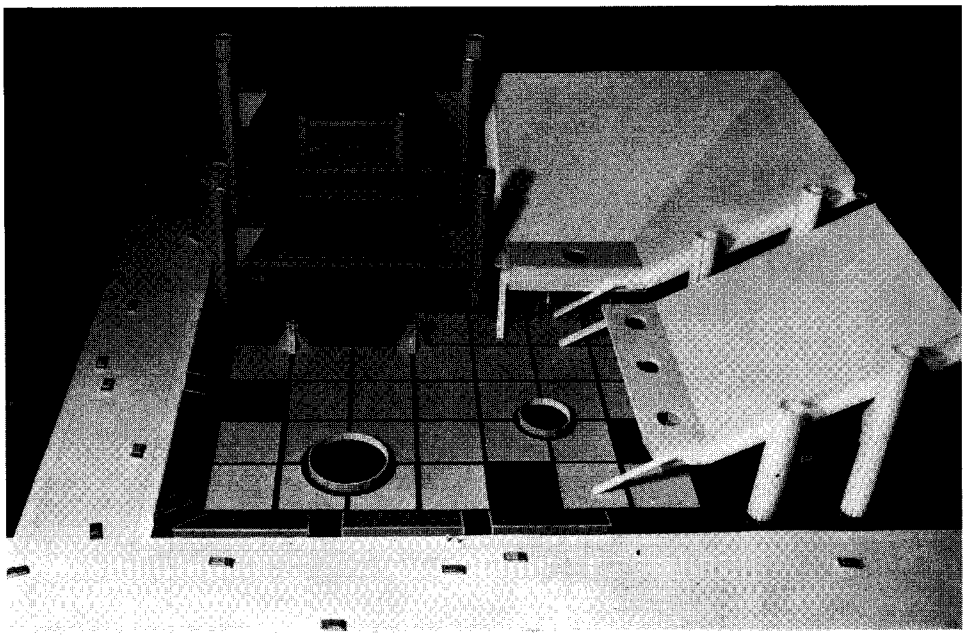
空間設計の立場からの解決として，段階的な把握を行いました。まず全項目を満足する最も根源的な最少限の骨格を基本空間としてとらえ，機能，システムの肉づけの段階を性格空間，実在としての空間形体を保持し，構築化する段階を実質空間としてとらえ，基本空間は機能，性格が未分化の状態，性格空間に於いて初めて本質的な意味あい特性が生れ，実質空間に於いてはあらゆる総合化が完了するのです。この原則は都市，地域，家のそれぞれの段階で作用します。特に基本空間が全体の方向づけを行う不変の最も重要な概念で，ちょうど一戸建の敷地の境界線，情況がそれにあたり，又自然の起伏や京都の町のグリッドシスステム等は，基本的な空間と考えられます。そして町屋の構成（都市の観点からみると）はその生活の表明のパターンという意味で，性格空間といえます。又中庭は町屋という単体からみると性格空間にあたり，町屋そのものの閉鎖性は基本空間にあたります。

そこでこの計画では，都市の基本空間は象徴的かつ外部との連結，拡がり（広場）の自由度の高さ，住居の完全な独立性という観点から，ほとんど物の存在しない点状の構成となり，地域の基本空間は，都市の基本空間から浮かせて透過した斜めのフレーム台地となり，かつ都市の広場にアクティブな空間を呼びおこし，かつ都市の画一化から単調さを救っています。

それは家――都市，都市――家と常にフィードバックしてとらえ気まぐれな性格空間を包みこむパワーをもっています。

紙面の都合上細詳な説明は略しますが，生れ出たこの空間と形体は，基本的なものを除いてどの様な形体も可能な訳で，すべてがその特例として計画されたものです。その様な秩序と律動を保てる基本的なシステムの提案が，この計画のすべてであり，第五項の美の条件にはどれ程の点が採れるのか，それは皆さんの思いやりのある判断におまかせします。





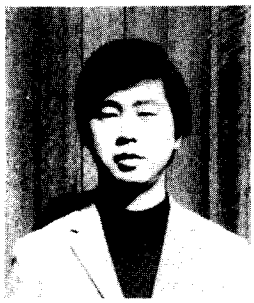
生きづく都市，新宿

人間の数の物理的集中や，機能的かつ大掛かりな諸施設の増大したものだけが，都市であるといいきれないところに，実態が不明瞭のまま都市が成長していく原因があるように思われる。そのよい例が新宿であろう。近々10年間を見ても，まったく様相を異にしている。これほど短期間に変貌をとげた都市も珍らしい。

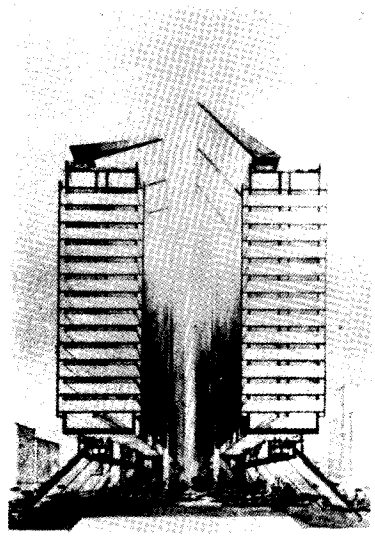
超高層ビルの林立を待つばかりの副都心，網の目をぬうような大地下街，娯楽施設の密集する歌舞伎町，そして昔ながらの飲食街などが雑然とミックスして生きづいている。

この混乱と猥雑さにこそ，生息する都市の証左であり，高密度な情報交換と情報生産という都市の機能を持つ，生活する都市といえそうだ。

都市と自然装置



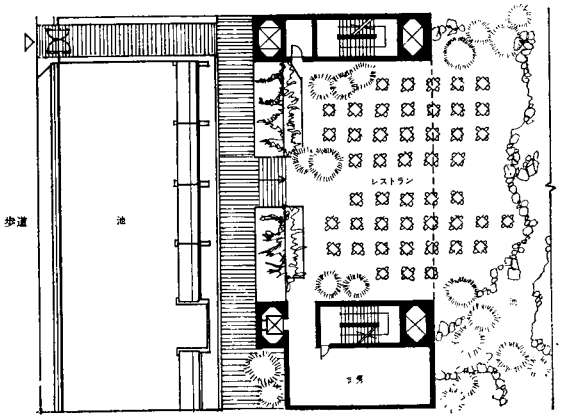
秋元敏雄



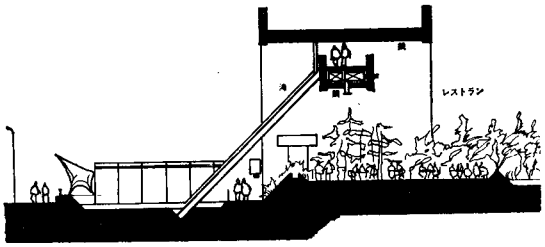
衆院本会議で政府提出の公害関係法14法案は昨日(12月10日)全案件可決で参院に送られたと聞く。しかし，公害は安易な政府の審議をしりめにアメーバ状に都市を，農村を侵し続けているのである。

我々は，何千万年の歳月を費やして蓄積された天然自然を破壊し，征服する事によって文化を築き文明化とみなしてきたが，自然史的産物である人間自身の自然本性を崩壊させ続けてきた事を換起せず，今，都市は公害問題の例をみるまでもなく，機械文明の異状な発達の中で自らのコントロールさえも失いつつある。河川は汚染され，樹木は枯れ，すみきった青空さえなくなりつつある東京，そこには人間と自然の調和などというにはおよそ縁遠い現状しかありえない。しかし，これら汚染された自然も考えてみれば，ただの天然自然ではなく，庭園，市街地の河川，公園と我々が人工的に手を加えたものがほとんどである。それは天然自然に対し，自然装置とでも呼べるべきものであり，本来，装置メカニズムとしてコントロールされるべきものであった。私にはこの〝自然装置〟が〝天然自然〟と混同して考えられ，装置としてパーフェクトに機構をはっき出来ないところに，無秩序な都市構成の重要な起因があるように思えてならない。もちろん，都市は複雑な構成要素を含んでいるわけであるが，建築的領域として，自然装置が重要な要素である事を指摘したいのである。

汚水を都市内の河川に流し込むような安易な自然主義的考えでは，高密度化する人工環境は決して適格にはコントロール出来ないはずである。すでに都市内の河川は，都民の視覚化されたいこいの場としての装置であり，汚水の処理はあきらかに別の装置



すでに都市は変動の秩序を失ってしまった高密度の人工環境と化している。われわれはレジャー施設を通して都市における，“自然装置とその装置素材としてのガラスの可能性”を提案し，新たなる都市の秩序を探るものである。



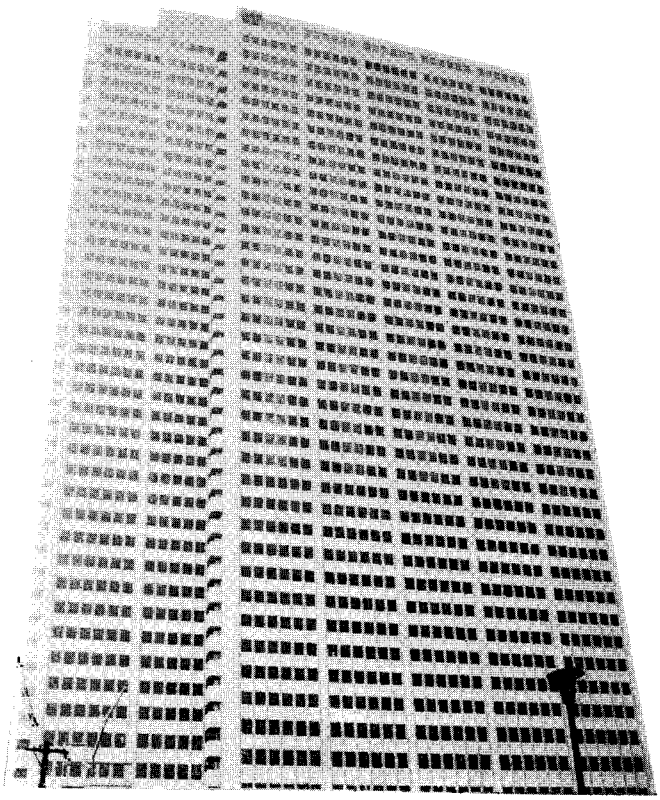
として考えなければならない。

また，公害も一般に天然自然と人工の量的均衡についての論理としてとらえられているようだが，もし現在の公害を天然自然の破壊からくる量的バランスの秩序の産物のみと考え，装置としての機構認識をもたないならば，それは人類の生命のはげしさと現代を否定するものであり，〝進歩と繁栄〟の解決にはなりえないにちがいない。天然自然の破壊そのものはもちろん残念な事ではあるが，高密度化される人工環境の新たなる秩序を生みだすためには，装置としての自然を導入する事により，質的な〝自然と人工〟の均衡を確立する必要があると考えられる。

ここで〝自然装置〟をもう少し明確にするならば，古くは日本の庭園，最近ではケビンローチのフォード財団ビルに例をみるように〝天然自然の人間に対するよさだけを抽出して人工化し，我々に美や親しみや，やすらぎを感じさせる装置〟と定義してよいのではないかと思う。高密度化された人工環境の中で，ただ単に量的な自然保護や，人間と自然の調和を叫んでみたところで，なんら現状に対する有効な都市論とはなり得ないと確信する。

建築設計を通して現代から未来に於ける都市を思うとき，私には〝自然装置〟は環境装置の重要な手がかりになるにちがいないと思われてならないのである。

上図は〝自然装置〟に焦点をおいて，あるコンペに応募したつたない案であるが，環境装置の一部としての考え方と御理解いただければ，さいわいである。（昭和40年卒）



戦後日本の産業及び経済の発展が世界の注目をあびてきた今日人間どうしの交流がおこり，我が国の価値を誇っている。都市再開発はその点平行して，なかなか進まず，日本人が今やっと注目しはじめている現状である。

東京という都市が，新らしい都市を作ろうと計画したのが，この淀橋浄水場跡を中心とした総面積 96万m^2 の広大な敷地であり，民間の手に渡ったのである。新らしい都市作りには，世界にも例がないほど理想的な場所で，そこには世界の人々が注目する新都心が生まれようとしている。

● 地上47階，170米の世界一の超高層ホテル

1971年6月5日，ここに世界一のホテルが誕生しようとしている。そして近い将来100米をこす超高層ビルが林立する新らしいビジネスタウンが出現することだろう。

● すべてのルームに明るい太陽を

超高層ホテルとして第一にスレンダーな形の処理が考えられている。先発の超高層ビルとは根本的に異なる出発であった。オフィスビルではなく，あくまでもホテルとしてのビルを建設することが目的である。すべてのルームが，太陽への窓を持つことが必要だったのである。

“京王プラザ”ホテル

米井稔容

● 絶好の立地条件を生かしたオープンな形の超高層ビル

東西南北の四面が開放されているスクエアな敷地。西側は遠く富士山を望み，東側は新宿の市街地を見る。そこでスレンダーなビルの二つの正面が東西に向く設計が選ばれた。北側は新宿西口広場から地下道の延長であり，4号線，新宿中央公園への通路でもある。この結果，四面に向けて開かれるオープンな形の超高層ビルの発想を得たのである。

● 人々はプザラに集まる

ＰＬＡＺＡ—それは広場である。都会で働らき，生活し，そこを訪れる人たち。その人々が光と緑とに憩い，語り合い，心と心の会話をもちたい，そんな広場。そこは人々の新しいコミニケーションのための場であり，プラザコミニケーションと云う言葉がいまここから生れてこようとしている。

● 世界の人々がやってくる

世界の中心になる新宿新都心。この超高層ビルが林立する新らしいオフィスタウンは世界の拠点の一つになることだろう。そしてそのとき，京王プラザホテルへ世界の人々がやって来ることが考えられるのである。

● 京王プラザホテルの数字

1）建物の数字として

a）高さ（地上高）	170m
b）階数（地上）	47階
c）階数（地下）	3階
d）敷地面積	14,500 m²
e）建築面積	8,486 m²
f）延面積	116,000 m²
g）建設費	135億円

2）サービスの数字として

a）宿泊客室数	1,057室
シングルルーム	60室
ツインルーム	935室
スイートルーム	58室
b）宿泊可能客数	2,000人
c）大宴会場（国際会議場）	
ディナー形式	1,300人
カクテルパーティ形式	3,000人
会議形式	2.000人
d）中小宴会場	11室
e）トップ会議室	14室
f）結婚式場	2ケ所
g）レストラン	11ケ所
h）バー，ラウンジ	9ケ所
i）駐車場収容能力	800台
j）エレベーター	
客用　12基　（展望室用　2基）	
サービス用	13基
k）エスカレーター	6基
l）冷房能力	2,200冷凍トン
m）暖房能力	33.2トン/時

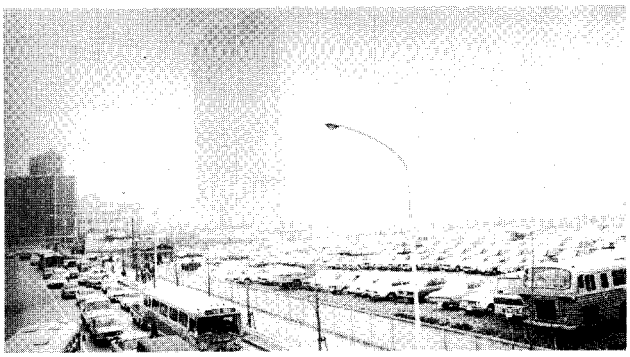
・その他の施設及び設備

a）ルーフガーデン
b）スカイプール
c）ショッピングアーケード
d）エアラインセンター
e）茶室

私は昨年の7月から実施設計に参加して現在に至っている。実施設計は現場が始ってようやく設計に取りかかった様な状態で現場に追いまくられる毎日である。

現在はインテリア設計に専念しているが，毎日毎日打ち合せの連続で毎晩打ち合せ用の資料作りに夜遅くまで頑張っている。予算調整もからんでくる。今考える事はこの京王プラザホテルが完成した時点を想像しての喜びだけだ。設計の段階で施主の注文で変更々々。それで又修正して施主サイドへ連絡。なかなか思う様に行かない。体のコンディションも合せなければならない。

この様な長い設計は今までに味わった事がない。良い経験になったと思う。設計と云う行為があって施工される。この様な仕事に従事する我々，紙と鉛筆がこの様な仕事をやって行ける。自画自賛するならば生きがいのある仕事だと思う。（昭和36年卒）



車を締出して排気ガス汚染をなくし，人間が車から道路を取り戻そうというキャッチフレーズのもとに，昨年8月2日日曜日を期して「歩行者天国」が実施された。銀座，新宿，池袋，浅草の4地区を合せた人手がなんと75万人。普段の約倍の人手だったという。

たしかに，車におどおどしながら，電柱や立看板の乱立する歩道を縫うように歩くことから開放された気分は壮快だった。夏の最中なのに，人混みも太陽の光も，なにがなし涼しかったのを想起する。上半身裸になって道路に座りこみ，ビールを飲む若者たちの笑顔が，今でも忘れられない。

"みごとに取戻された人間" と鳴りものいりで始まった「歩行者天国」も，半年すぎた姿はどうなっているのだろうか。最初とうって変わつた真冬の日曜日，オーバーの襟を立て両手をポケットに突込んで歩いてみた。新

宿はやはり若者がだんぜん多い。道路一杯の人並みだが，なんと寒々しい風景だろう。大集団が目に見えぬ統率者に引き入られているかのごとく，静かに移動している。どこを見ても休息の場はみあたらない。まさに歩道が広がっただけで，人々は解放なんかされていない。解放の出口を捜して迷っていた。

道路は生産流通の機能を果たしてきたのはむろんのことだが，権力の征服路として発展してきたといえる。何千年というこの制圧があるからこそ，道路を歩くという単純な行為にも意義がある。昔ギリシア市民は，1日の大半を道路ですごしたという。現在の立ち止ってはならない，いや立ち止まれない天国なんてナンセンスだ。道路ですごすとはなんと良い言葉だろう。人間疎外から一時的にでも解放されたこの天国で，もっと野放図に遊んでみようではないか。天国は楽しいはずだ。

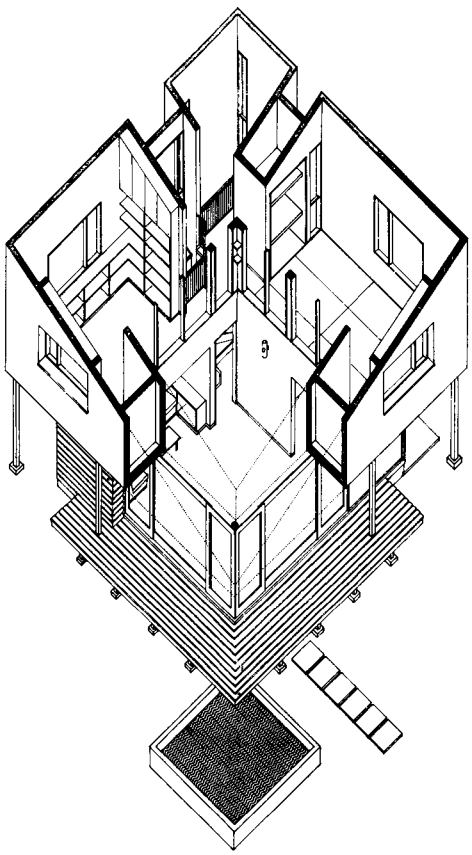
マイ・リビング

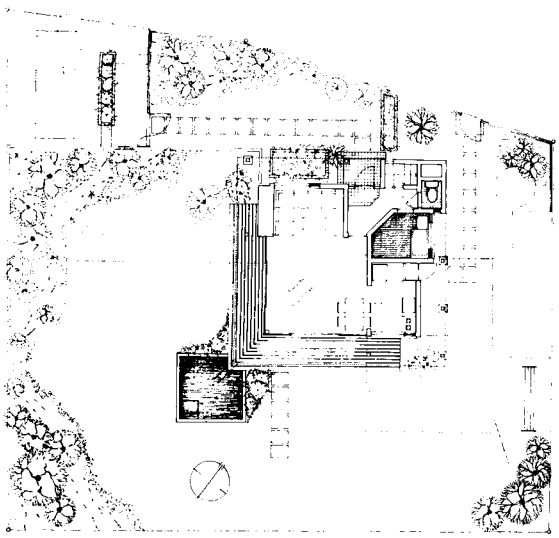
若いうちに我が家を持つことに尚早さとはにかみが入り混じり，一種の不安感を禁じ得ませんでした。反面，日頃からやってみたいと思っている実験が，試作できるのが大変な魅力で，微妙な気持で設計を始めたものです。

住宅には，生活行為に密着した機能と設備を有した，きめの細かい装置は不可欠の条件です。しかし，それだけでは充分でなく，その家の持ち味がなくてはならないというのが私の信条です。それでこそすまいといえるのでしょう。日常生活からの制約を出来るだけ整理して，生活の変化を楽しむ空間構成に重点を置いて設計してみました。

敷地はほぼ正方形に近い台形で，北側に共同の私道があります。東南に多摩丘陵，西南に富士山が眺望できる景観に恵まれた場所です。方位は敷地と対角線上にあるので，東から西へ開口部を設け，北測を壁にする案に落着きました。配置計画では，台形から生まれる部分を前庭とすることにより，道路からのアプローチが効果的に行なわれ，カーポートも広々取れました。

住宅全体のデザインは，敷地に合わせて正方形にまとめ，ガラス窓，池などもこれに順じました。正方形には静けさと正確さのイメージがあり大変シンプルです。片流れ





望月大介

の変形屋根も予想以上に効果的でした。流れを合せた寄せ谷型の屋根を，雨水は勢いよく流れて，南隅の池へ落ちていきます。冬至の正午には，雨水の溜った池の反射光が玄関吹抜けの天井まで届き，かげろうをつくってくれます。

我が家の照明器具は全て和製ですが，家の坪単位に比べると高いものになりました。夜を演出する装置ですから，贅沢にそれでいて機能的に，部屋全体の色彩に合わせて白で統一しました。居間には，外部軒先，立体的垂直空間，濡れ縁など日本建築のもつ伝統的な手法を用いて，外と内を継ぐ空間づくりを心掛けました。

全体的に予算が不足がちでしたので，工事は土地の職人に個人的に依頼し，時には墨つぼを片手に墨付けを手伝ったりして，結構楽しい経験になっています。また，大壁構造の利点を活用し，隠れる部分は材質をおとしました。南隅の丸柱，濡れ縁の縁甲板以外は杉材とし，対角線に走る谷木は軽量鉄骨を併用させています。

住宅は人間生活の基本的シェルターで，我が家はあくまで一つの試みです。これからの生活を通していろいろな矛盾を引き出し，住宅を中心とした生活環境の意味を考え直していきたいと思っています。

クラブ便り

海の賛歌

ヨット部 深沢治男

夏，ときくと，ツバがかわく
口の奥が塩からい
体内で騒いでいるのは，海の水だ。

健康な身体には，海から紹待状がくる。
浜辺をうつ波の音，腕にからむ水の重み。
それらは　海精の序曲なのだ。

海を愛する者は
無限の水平線を　一点，
汚して　面白がる者。
その一点が，又一点増えた時
どうしても近寄って行ってしまうもの。
彼は目の人である。

たった一つの　燈にも，そこには
意味があり，人のにおいがある。
乾いた砂――狂気させるツブ
踊りうつる金砂――青い沈黙の空間

“ヨット”

この手の中を，
たまらなく熱くすべり去ろ
うとするロープめ。
あばれもののこの糸に，
帆を張り，海をわけて進む，力がある。
手を殺してしまうこのロープめ。
タッグ！
足の甲をバンドに突込んで
うーんとヒールする。波が肩の下を走る。
ザバザバ
波をきってすべり込んでいく白い船体(ハル)。
ワァー，シリがビショヌレ
バシーン，バシンと
波はわれらを網のようにつつむ。
風め吹け，しかしこのロープめ。

スターボー。スターボー！
ドケドケ！　バカヤロー。
ザンネン，衝突出来なかった
又，はなれていく　ヨットとヨット
タッグ！
斜めに帆をそろえて進む隻の舟
旗をめがけて，入りみだれ，大きく振りまわるブーム。
ジグをはれ！

“クルーザー”

朝だ。起きろ，起きろ，といわれて目を開けても，小さな窓がポツンと一つ。方向がつかめない。ゆれている。ザヴァッ，ザヴァッという音。ア船内にいるのだ。たしか昨日の夜11時半をすぎてから，カットワッチ（見張）をとかれて，バース（寝台）にとけ込むように，もぐり込んだきり。そうだ。半分夢の中で，地元の漁師が，ドナリ声をあげていたっけ。「ドーシタンダ，バカヤロー。アンカーがひっかかってるじゃーないか。オーツ」

我々は，まっ暗闇の中で，小さな漁港に入っていたのだ。かまうものか，寝てしまえ。そんなことが確かあったなと思いながら，外に出てみる。そういえば，懐中電燈で，細い板をわたって，上陸。どこやらでションベンもしたんだ。しかしあらためて見る朝のこの島の漁村は，なんと美しい所なのだ。私は，未知の国へ空から着陸する時にえた感慨にも劣らない，新鮮なものに浸った。私は今，陸地にあがっていくのだ。マイナスの土地から，いつもいるこの大地へ。

“何もかも見えてしまう世界，領域”

そこには，黄色い野イチゴもなければ，谷川に，煙を立ちのぼらせる人の営みも，まったくわいてはこない。見るべきものが存在しない世界なのだ。何ものも期待しえない，それゆえに，そのままの世界。そして見えない世界をさまようのが，クルージングの魅力である。帰結は，見えてくる燈台，陸，自転車，人なのである。

一つ板の上で漂泊した者達の上陸。これほどに満足のいく一瞬が，他のスポーツにありえようか。

ヨット，それは　私の心。
その長く退屈な航海，
それへの準備，めんみつな計画。
針路をとる。
かぎられた食器，
かぎられた食事，
かぎられた生活。

海　生死　太陽。
海の歌　クルー　大地。
ロープ　帆　ナイフ　風　波。
夜。
かぎられた中での　航行。

“シーマンシップ（潮気）”

海での死をさけるための，全てのテクニック。それは生きる者をささえる，鍛えられた肉体であり，精気と，古来からの技法を駆使する，持久力のいる仕事である。

私はヨットの２年生である。１年目は，ＬＧＳクラブとＮＯＲＣ（日本外洋帆走協会）主催の講習会に，それぞれ参加した。２年目は会社の同僚の舟と，われら同窓会の金田さんの舟にのせてもらった。いつか，辺見マリと乗ったりしたこともある。

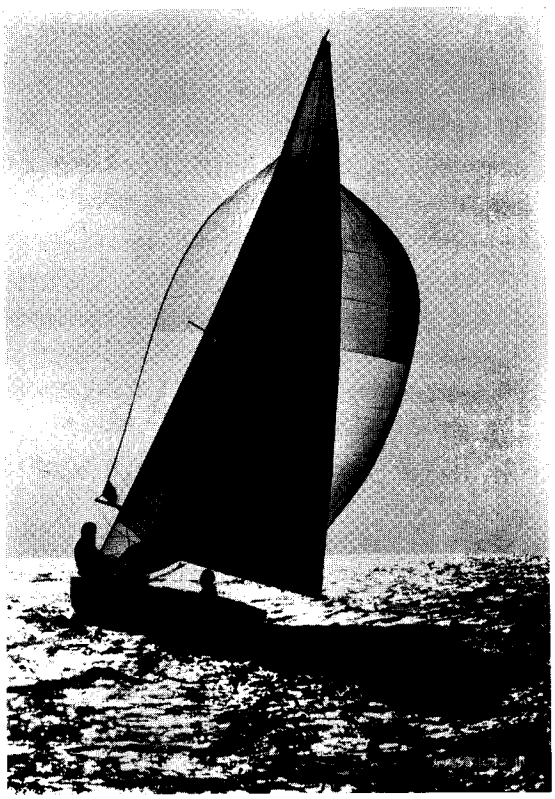
ヨットに乗っていると，意外とやることがない。つまりタイクツなのだ。しかしいざという時は，大変である。何が起るかわからない不気味さがある。動作は迅速で，適確でなければならない。装備破損，衝突，落水，座礁，漂流，沈没。

しかし，我々に残された自然は，海にしかない。鎖国時代でも，折れた帆柱の千石船で，アメリカ近海まで漂流していってしまう。海の中の小さな島に住んでいるのだから。

撃沈された大和，武蔵にこりずに，大いに海へ乗り出そう。

ヨットに興味のある方は，建築学科同窓会ヨット部の　金田会長か，私まで御連絡下さい。

○日本都市建築設計事務所
　　金田昭治　　Tel. 376-2711
○株式会社佐藤秀工務店　設計部
　　深沢治男　　Tel. 356-0311



あいさつ

建築学科同窓会の今後に望むもの

小高鎮夫

昭和42年1月に建築学科同窓会が設立され，杉野設立準備委員長の1年余の努力の後を受けて，会長に選出された。同窓会としてなすべきことは，名簿の整備，会報発行，会費徴収，そして会員相互の親睦であるが，会員皆様の御協力によって徐々にその実をあげてきた。

更に工学院大学学園相互の連絡協議会である。

学園同窓会の結成が42年11月になされたが，その結成母体の一つであった校友会がいまだにその主旨を理解して頂けず，学園内の6同窓会の各種協議会へ参加せずにいることは，大変残念な事であった。

建築学科同窓会として，今後は，会員相互の交流をはかる場としての，同窓会室を学内に確保し，卒業生，学生そして校友会の大先輩との親睦にもっと力を入れ，他学科他同窓会との協力のもとに同窓会の本来の目的に向い前進すべきであろう。

金田新同窓会長の御健闘を祈ります。

（昭和34年卒）

みんなでスクラムを組もう

金田昭治

同窓会設立以来満4年を迎えようやく組織運営が軌道に乗って来た感があります。

昭和45年11月1日の第5回定期総会において小高前会長に引続き，私が会長を勤めさせて戴くことになりました，現在の会員数は正会員4,346名，準会員2,325名，合計6,671名(昭和46年1月31日現在）で毎年500名位づつ会員が増加しております。

私はこのような大きな組織をまとめて行くことは非常に困難と思いますが力の限り同窓会と会員の発展の為に尽したいと考えています。

現在の私学の学校教育のありかたは，マスプロ教育であり教授と親しい人間関係の確立もできぬままに卒業してしまうありさまだと思います。又同級生間においても100人以上も居るクラスメートの中では名前と顔が一致しないうちに卒業と云うのが現状です。これではに実に寂しいことだと思います。そこで同窓会の必要性がとなえられ在学中に成立しなかった人間関係を確立し，永遠の親しみを持てる組織として作られたのがこの会です。

工学院大学建築学科を卒業された皆さんは全員この同窓会の正会員であります。ここで，設立当時に振返ってみて同窓会の意義を改めて考えたいと思います。

ここに設立主旨の会則前文をかかげ私なりに検討してみます。

前文　私達建築学科同窓生は，伝統ある母校を愛し，交友維持発展させる為，互に親睦を図り，相互扶助の精神を尊び広く建築の諸問題を研究することを目的とし，健全な人間関係の確立と意志伝達の機関として，ここに規約を定めて，工学院大学建築学科同窓会を結成する。

ここで伝統とは何か，歴史が古い学校（工学院は創立83周年）が伝統があるとは，一概には云えないと思う。卒業生が人間性豊かに成長し社会において建設的な主張を堂々と述べ，重要な地位を示す，これらの実力ある卒業生が多数出て，学校との結び付きを深めてこそ伝統が確立されると思う。

出身校と云うものは好むと好まざるとにかかわらず人生の頭にのしかかり体の一部を構成しています，母校を愛すると云うことは自分を大切にすることに通じます。

卒業して社会へ出るととかく行動範囲が狭くなりがちの性格の人がいるが結局は自分が損をします。お互い縦横に，同窓生との連絡を緊密にしていればいろんな情報が入ってくるし自己の能力の開発にもプラスされます。

大学は勉強するところと考えるのは当然でありますが，なお親し

い仲間を作ることが大切だと思います。そこで学校の成績は一年間で何人友達ができるかによってきめたら面白いし，一人友達ができたら一点，百人友達ができたら百点，教授と友達になれたら最高でしょう。勉強は学生時代で終ったのではなく，大学を卒業することによって自分の勉強すべき（進むべき）方向がスタートされたのです。建築技術及びデザイン，材料と私達のまわりは目まぐるしく発展しております。絶えず勉強していないと取り残されてしまいます。そこで卒業しても学校を思い出して下さい。むずかしい問題を学校へ持って行けば研究テーマになるので教授も喜んで一緒に研究して下さると思います。同窓生も多数大学の研究室で働いていますから共に皆さんの問題を考えるでしょう。

学校には材料実験室も有りますし図書室も有ります。各研究室には豊富な資料が有ります。何よりも問題を見い出したら何処の研究室へも気軽に出入りして学校に恋人のごとき親しみを持って下さい。

自分のレベルを上げることは自分の為ですから大いに勉強すべきです。卒業して社会へ出てから，もっと勉強したい方には大学院もできました。専攻科という一年課程の夜学もあります。

日本経済発展の基礎ともいうべき技術も我々に支えられています。新宿副都心計画も着々と進んでおります。工学院大学も変りつつある環境の真只中に立たされております。今こそ同窓生がスクラムを組んで社会に進もうではありませんか。（昭和33年卒）

告知板

⊙京阪神地区別懇談会開催

去る2月14日，大阪駅前第一ビル12階北京において，工学院大学学園同窓会京阪神地区別懇談会が開催されました。

本部からは各科同窓会より2名以上の代表を送り，建築科よりは，木村，小高，金田が出席しました。京阪神地区の方々と懇談できたことは非常に有意義でありました。地方では校友会の組織が強力であるが老齢者の集まりです。若い人達の間からもっと若い人達が自由に集れる会にして欲しいと同窓会に対して期待が大きかった。

学園同窓会山根会長より校友会との関係の説明があり，引続き各科同窓会の会長より各科同窓会の近況報告がなされました。出席者は50名で中華料理を食べながら懇談会にはいり，出席者全員の自己紹介がありました。

東京を離れた地方の人達は母校へはなかなか行けませんので同窓生相互の継がりを特に望んでおりました。今後は京阪神支部を設置して強力なる結束が期待されます。建築学科同窓会員で37年卒業，三井建設大阪支店勤務の平井洌さんに今後会員の方に会われたらお互いに結束を深めるべく呼びかけて戴くようお願いして来ました。

⊙原稿募集

編集部では毎年原稿を募集しています。第3号の編集をはじめた11月までに一つの原稿すら手元にない状態でした。そこで今回は当初＜都市＞と＜ヨーロッパ＞というテーマを設定して，身近かな人達に原稿を依頼しました。＜都市＞では新建築のコンペ'70で最優秀賞の豊田氏と，セントラルガラスの'70コンペ入賞の秋元氏と，京王プラザホテル工事担当者の米井氏に依頼しました。又，＜ヨーロッパ＞を特集したのは最近特にヨーロッパ研修の話題が多かったので企画してみました。次回も漠然と＜都市＞というテーマは残しておきたいと思いますので皆さんの身近にある話題や研究論文，又はプロゼクトなどを，お寄せ下さい。その他紀行，随筆，小説，マイ・リビング，その他実施設計案，計画案等多大な投稿を期待しています。

⊙会誌愛称及び表紙デザイン募集

未だ会誌に愛称がありません。親しみのある名称をお願い致します。表紙の必要な文字は第3号を参照し，同窓会誌にふさわしいデザインをお願いします。いずれも採用の時は薄謝を呈します。

⊙消息

同窓会の大切な仕事は名簿の完備にあり，しかも卒業生，在校生の誰れでもが，必要な時に見て利用出来なければなりません。そのためにはあなたの正しい住所と勤務先が必要なのです。同封したハガキの，所定の欄に必要な事項を書き込んで至急同窓会事務室へ郵送して下さい。その後の変更は学園同窓会事務室へハガキか電話でご連絡下さい。**これによって，総会のお知らせと同窓会誌は確実にあなたのお手元に届きます。**現在，次回名簿の資料作成を開始しております。郵送には，卒業年度と専攻を明記して下さい。

名簿分科会　木村　幸弘

送り先及び問合せ先

同窓会についての詳しいお問合せは各卒業年度の運営委員又は，同窓会事務室にお願いします。なお運営委員名簿は巻末をご利用下さい。

送り先

東京都新宿区西新宿1の24の2
工学院大学建築学科同窓会
(342) 1211　内287

運営委員会記事

第18回運営委員会 昭和44年1月16日

1 寄附行為改訂委員（学校評議員）小高会長選出
2 学園同窓会代議員選出（定員15名）
3 会誌第2号の原稿を各委員に依頼する（出席者15名）

第19回運営委員会 昭和44年10月20日

1 総会開催の件（第4回）
　日時 昭和44年1月2日（日）
　　12時30分～3時00分 総会
　　3時00分～6時00分 懇親会
　場所 工学院大学新館8階校友会会議室
　議題 ① 3年度事業及び会計報告
　　② 4年度事業案及び予算案
　　③ 会則9条副会長1名を2名に変更の件
　　（事業年度10月1日～翌年9月30日）
2 会誌第2号発刊報告
3 厚生部活動充実について （出席者15名）

第4回定期総会

　日時 昭和44年11月2日（日）午後1時
　会場 工学院大学新館8階校友会会議室
　出席者 38名（委任状380通）
1 開会の辞 木村幸弘
2 会長挨拶 小高鎮夫
3 議長選出 議長 藤井正伸 書記 倉持道夫
4 3年度事業報告 金田昭治
5 運営委員会報告 金田昭治
6 3年度会計報告 小儀一男
7 3年度会計監査報告 宮島隆則
　3年度会計内容検討の結果 異常なし承認
8 4年度事業計画案 金田昭治
　各部会充実 囲碁部 ヨット部 釣部
　名簿作製 第1回1,200部配布 第2回1,500部作製
　準会員援助 学内コンペ及び学園際に援助
　総会，懇親会会見相互の親睦を深める。
　学園同窓会援助 校友会との関係を改善する。
9 4年度会計報告 小儀一男 別表のとおり
10 閉会の辞 木村幸弘

第3年度会計報告 昭和43年10月1日～昭和44年9月30日

■歳入の部

前年度繰越金	4,341,018
会費等収入	2,570,020
学生会員 入会金会費	2,566,520
卒業生会員 入会金会費	3,500
名簿代金	2,000
懇親会寄附	5,000
預金利息	225,832
貸付信託利息	68,072
定期預金利息	157,760
合計	7,143,870

■歳出の部

同窓会誌発刊費	357,090
会誌印刷代	344,000
折込ミハガキ	12,800
マイクロ写真（キャビネ）	290
各部会充実費	6,690
同期会援助 34年度卒	1,800
〃 38年度卒	4,890
厚生部経費	16,000
（ヨット部援助金	16,000）
名簿発刊費	57,240
（名簿印刷費その他	57,240）
本部経費	15,475
事務用品	3,675
会議費	11,800
準会員援助金	30,000
学園同窓会分担金	253,120
44年度分担金	171,000
学園同窓会会報印刷代	25,000
懇親会出席者分担金	14,420
自動車部全日本ラリー援助金	30,000
ヨット部遭難見舞金	5,000
海外工業技術移住研究部 海外実習費助金	7,500
総会費	78,485
総会通知料金	29,925
料金受取人払	1,860
はがき，通知費，封筒，印刷	32,000
文具費	1,560
懇親会経費	13,140
次年度繰越金	6,329,770
合計	7,143,870

第4年度　予算案

■歳入の部

前年度繰越金	6,329,770
会費等収入	2,550,000
学生会員入会金会費	2,500,000
卒業生会員入会金会費	50,000
合計	8,879,770

■歳出の部

同窓会会誌発刊費	550,000
各部会経費	70,000
名簿発刊費	500,000
本部経費	50,000
準会員援助金	100,000
予備費	60,000
総会費	100,000
学園同窓会分担金	250,000
小計	1,680,000
次年度繰越金	7,199,770
合計	8,879,770

第20回運営委員会　昭和45年2月3日

1　会誌第3号発刊の件
2　新名簿発刊の件（3月25日迄に新卒業生に渡す）
3　厚生部活動の件　ヨット，釣，囲碁会等，親睦を計る。
4　短大，専攻科，大学院卒業生を正会員にする。
5　会費徴収の件　会費未納者が多いので早急に納入して欲しい。
6　学園同窓会地区別懇談会の件
　神奈川地区で各学科同窓会合同で懇談会開催
　日時　3月15日
　場所　横浜中華街陽華楼大飯店
　上記地区別懇談会は120名の出席者があり，盛況のうちに開催され同窓会の横の連絡の基礎ができた。
　（出席者13名）

第21回運営委員会　昭和45年7月2日

1　学園同窓会44年度事業及び決算報告
2　学園同窓会45年度事業案及び予算案
3　建築学科同窓会厚生部会活動について
　ヨット部は新会員も増えて毎日曜日，江の島で開催
4　建築学科同窓会会誌第3号原稿募集
5　建築学科同窓会45年度新入生よりの入金状況報告
6　建築学科同窓会，専任アルバイト雇用の件承認　卒業生の住所確認を主な仕事として2部学生菊田氏採用
　年俸24万円（月2万円）　（出席者12名）

第22回運営委員会　昭和45年10月6日

1　第5回総会開催の件
　日時　昭和45年11月1日（日）
　　12時30分～3時00分　総会
　　3時00分～5時00分　懇親会
　場所　工学院大学新館8階校友会会議室
　議題　4年度事業及び会計報告
　　5年度事業案及び予算案
　　会長改選
2　会誌第3号編集を方角氏及び園田氏に依頼
3　会費徴収の件　クラス会を開き役員かPRに行く。クラス会援助1人当り30円　（出席者14名）

第5回定期総会

　日時　昭和45年11月1日　午後1時
　会場　工学院大学新館8階校友会会議室
　出席者　21名（委任状450通）
1　会長挨拶
2　4年度事業報告
3　4年度会計報告
4　5年度会計監査報告
5　5年度予算案
6　新役員選出
　会長　金田昭治氏　昭和33年卒
　副会長　藤井正伸氏　昭和41年卒
　副会長　木村幸弘氏　昭和39年卒
　会計　小儀一男氏　昭和40年卒
　会計監査　宮島隆則氏　昭和34年卒
　会計監査　宮沢孝夫氏　昭和40年卒
　事務局長　小高鎮夫氏　昭和34年卒

第5年度事業計画案　昭和45年10月1日～昭和46年9月30日

1　同窓会会誌第3号発刊　編集　古角，園田
2　厚生部会活動促進
　囲碁部　毎月定例会第1土曜日，久保5段
　ヨット部　夏季3カ月間毎日曜日江の島開催　金山
　山の家　7月最終土曜日工学院山の家で開催
　釣部　企画中　木村
3　名簿発刊　45年3月新卒業生分追加印刷

4　本部活動
　運営委員会　1月，4月，7月，10月，開催予定
　役員会　会長，副会長，会計，事務局長，毎月開催
5　準会員援助　学内コンペ及び学祭援助
6　校友会との関係，改善，積極的に一体化を促進
7　総会及び懇親会学祭開催中の日曜日又は11月3日

第3年度会計報告　昭和44年10月1日～昭和45年9月30日

■歳入の部

前年度繰越金	6,329,770
会費等入会金・会費	2,621,320
卒業生会員，入会金・会費	61,300
名簿代金	11,600
会誌2号広告料	46,000
預金利息	236,139
貸付信託利息	157,493
定期預金利息	55,114
普通預金利息	23,532
合計	9,244,829

■歳出の部

同窓会会誌発刊費	182,540
編集・発送アルバイト料	63,000
編集交通費，夜食代	10,000
会誌発送料	109,540
各部会経費	16,000
ヨット部　ヨット使用料	16,000
名簿発刊費	558,750
名簿印刷費	460,000
名簿整理・発送アルバイト料	98,750
本部経費	64,505
会議費	8,680
事務用品代	1,760
挨拶状・ハガキ印刷代	11,800
送料・切手代	880
アルバイト料	40,000
郵便振替払込料金	1,385
準会員援助金	50,000
コンペ援助金	50,000
予備費	75,527
学園同窓会代議員会分担金	10,927
学園同窓会会報分担金	30,600
学園同窓会関係援助その他分担金	27,000
会費二重納入分返金	6,500
総会費	92,478
総会通知料金	41,940
総会通知宛名書アルバイト料	3,000
総会通知印刷代	31,600
懇親会経費	15,938
学園同窓会分担金	287,953
44年度分担金残金	50,310
45年度分担金	237,643
小計	1,327,753
次年度繰越金	7,917,076
合計	9,244,829

5年度予算案

■歳出の部

前年度繰越金	7,917,076
会費等収入	2,710,000
学生会員入会金・会費	2,650,000
卒業生会員入会金・会費	60,000
預金利息	338,000
貸付信託利息	200,000
定期預金利息	118,000
普通預金利息	20,000
合計	10,965,076

■歳出の部

同窓会会誌発刊費	550,000
各部会経費	80,000
名簿発刊費	100,000
本部経費	50,000
準会員援助金	100,000
事務員給料	240,000
総会費	100,000
学園同窓会分担金	360,000
予備費	50,000
小計	1,630,000
次年度繰越金	9,335,076
合計	10,965,076

編集後記

あー！やっと会紙３号の編集が，終った。
第３号よ第４号への道を開け！
ところで，同窓会とはなにをするところ？
すし喰いながら建設的な話し合いを，年に４・５回やるところだ。会長さんもいるし，副会長さんもいるよ。
予算もあるよ。50人も集まらないのに総会が成り立つし，会費も納めないのに会員なのだがら不思議な団体だよ。名簿もつくるし，ヨットもある。
すばらしい会則の前文もある。
ある人は同窓会はあるだけでいい年に一回，椿山荘に集まってビールを飲みながら，歓談して，親睦をはかればいい』という。
ほんとうに面白い団体だよ。今，山小屋をつくろうとか，あつまり場をつくろうとか話しあっているそうだ。もっと全体を包括するような企画はないものかなあ――。

有言不実行者